

青年による副業品の研究

—山形県新庄町の最上共生青年会を事例として—

A Study of Side Job Products by Youth Group Members:
A Case Study of Mogami Kyōsei Seinen-kai in Shinjo-cho, Yamagata Prefecture

木村 裕樹

KIMURA Hiroki

要 旨

大日本聯合青年団は郷土振興のため、副業品の研究を重視し、青年創作副業品展覧会を開催した。これは地方の青年たちが製作した副業品を大都市で販売することを目的としたイベントで昭和3（1928）年から昭和11（1936）年まで、都合9回開催された。優秀な作品は表彰されたほか、宮内省より御買上の栄に浴することもあった。

本稿は大日本聯合青年団が奨励した副業品の研究に青年たちがどのように取りくんだのかを、青年創作副業品展覧会に焦点を当て明らかにするものである。その際、青年団の事例として、山形県新庄町の最上共生青年会を取りあげた。新庄町には昭和8（1933）年、「雪害救済運動」にもとづく農林省積雪地方農村経済調査所（「雪調」）が設置された。「雪調」は雪国の農山漁村の経済更生を目的した機関であるが、特産品や副業の開発にも従事した。昭和12（1937）年以降は、民藝運動の拠点ともなっていく。一方、新庄町の青年団は大日本聯合郷土資料陳列所に多数の資料を寄贈したほか、同所の公募研究にも積極的に応じていた。

青年創作副業品展覧会の入賞者には、複数の農民美術の団体が発表の場としていたことや、女子青年の活躍がみられたことが明らかとなった。また、販売を前提とした出品物は実用品であることが求められた。

最上共生青年会は雪害救済運動に貢献した一青年、小野恵敏が中心となり創設された。その活動は昭和9（1934）年、大日本聯合青年団郷土資料陳列所の大西伍一が新庄町を訪問したことを機に活発となる。同会は陳列所に多数の資料を寄贈したほか、大日本聯合青年団が主催する公募研究にも積極的に応じた。とくに青年創作副業品展覧会に出品され、宮内省御買上にもなった胡桃細工「福雀」は小野が宣伝、販売につとめたものである。惜しくも小野は30歳を前にして早世するが、その後、青年会の活動によって代わるように「雪調」に誘致されたのが民藝運動であった。ただし、両者のかかわりについて、確固たる証拠を未だ見出すことはできていない。とはいえ、青年たちによる副業品の研究が民藝運動を受容する下地をつくった可能性があることを、本稿では指摘しておきたい。

【キーワード】 青年創作副業品展覧会、最上共生青年会、農林省積雪地方農村経済研究所、民藝運動、山形県新庄町

1. はじめに

大日本聯合青年団は郷土振興のため、産業活動の指導奨励に注力した。青年副業品展覧会や一人一研究資料展覧会の開催、大日本聯合青年団表彰規定や研究助成金交付規定の制定などが挙げられる。とりわけ、副業品の研究を重視し、「青年の創作的能力の涵養と副業の向上発展を目的」として、青年創作副業品展覧会が昭和3（1928）年より昭和11（1936）年まで、都合9回開催されたのである〔熊谷 1942：289-294〕。

本稿の目的は大日本聯合青年団が奨励した副業品の研究に青年たちがどのように取りくんだのかを、青年創作副業品展覧会に焦点を当てながら明らかにすることである。その際、山形県新庄町（現新庄市）の最上共生青年会を事例として取りあげた。新庄町には、昭和8（1933）年、楯岡町（現村山市）出身の松岡俊三代議士が主導した「雪害救済運動」が実を結び、農林省積雪地方農村経済調査所（以下、「雪調」とする）が設置された。「雪調」は、雪国農山漁村の経済更生に関する調査研究、指導機関であるが、とりわけ、地方の特産品や副業の開発にも貢献した。同所は初代所長の山口弘道が昭和12（1937）年3月、来訪した柳宗悦との関係を深めて以来、民藝運動の拠点となっていく〔大友 1999〕。ただし、それはあくまで農村工業の振興を意図した経済更生の方策であり、手仕事を旨とする民藝運動とは相いれないものであったことも指摘されている〔及川 2003；今野 2016〕。

一方、最上共生青年会は郷土資料陳列所への寄贈品が多数あること⁽¹⁾（本書資料篇）や、大日本聯合青年団が公募した郷土工芸の研究に同会の小田島寅蔵が助成金を得て、「郷土特産亀綾織の研究」を発表していることから熱心な団体であったことが窺える〔小田嶋 1936〕。

なお、青年創作副業品展覧会については『日本青年新聞』（日本青年館資料室蔵）の関係記事を主たる資料として用いた。ただし、その全容を明らかにすることは必ずしも本論の主旨ではないため、付録として掲載することにした。

2. 求められた副業品

『日本青年新聞』は昭和5（1930）年創刊であるため、それに先行する第1回（昭和3年）と第2回（昭和4年）の青年創作副業品展覧会（以下、副展とする）の様子はわからない⁽²⁾。しかし、『大日本青年団史』を参照すると、昭和3年3月、日本青年館にて開催された第1回の模様は、次のようであった。

二府三十一県、北海道、朝鮮、台湾とほとんど全国に亘る各地の青年の努力に成る出品物は二千百十八点に達し、これに農林省蒐集に係る世界各地の副業参考品約七百点（日本産業協会出品）を加へ、量質ともにすぐれた内容をもつて一般の展観に供したのであつた。三日間を通じて入場者約一万、出品物は来館者の希望に応じて即売したが、出品点数の六割弱、価格に於て五割七分の売上があつた。出品物に対しては（一）青年の創作的製作品で技術の秀でたもの、（二）地方に於て相当普及し、製作上特に創造性は認められないが技術の秀でたもの、の二項に主点を置き、農林省副業課の技師並に嘱託を審査員とし、主催者側もこれに参加して審査を行ひ、優秀作品には賞状を授与した。

このことから、展覧会では出品物の展示即売が行われたこと、農林省副業課の技師たちの審査により、優秀な作品に賞状が授与されたことがわかる。また、同書をもとにすると、第1回から第9

表1 青年創作副業品展覧会の開催記録

	会期	会場	出品数	備考
第1回	昭和3年3月10日～3月12日	日本青年館	2,118点	
第2回	昭和4年3月21日～3月23日	日本青年館	4,023点	
第3回	昭和5年3月21日～3月23日	日本青年館	6,000点	生活合理化展覧会と同時開催
第4回 第1次	昭和6年4月17日～4月19日	日本青年館	4,821点(創作品)	第1回一人一研究資料展覧会と同時開催
第4回 第2次	昭和6年5月8日～5月12日	大阪市三越百貨店	37点(研究資料)	
第5回 第1次	昭和7年4月8日～4月10日	日本青年館		第2回一人一研究資料展覧会と同時開催
第5回 第2次	昭和7年4月29日～5月3日	京都市商業会議所	8,914点(創作品)	
第6回 第1次	昭和8年4月11日～4月16日	日本青年館	15,536点(創作品)	第3回一人一研究資料展覧会と同時開催。 侍従職及び皇后宮職より多数の御買上
第6回 第2次	昭和8年5月2日～5月6日	神戸市大丸呉服店	115点(研究資料)	
第7回 第1次	昭和9年4月12日～4月16日	日本青年館	21,736点(創作品)	第4回一人一研究資料展覧会と同時開催
第7回 第2次	昭和9年5月11日～5月16日	名古屋市松坂屋呉服店	173点(研究資料)	
第8回	昭和10年4月3日～4月7日	日本青年館	不明	第5回一人一研究資料展覧会と同時開催
第9回	昭和11年5月7日～5月17日	東京伊勢丹百貨店	18,227点(副業品) 154点(研究資料)	

注：『大日本青年団史』をもとに作成

回までの副展の開催日時、場所、出品点数は表1のようにまとめられる。これをみると、第4回以降は日本青年館とは別に、三越呉服店をはじめとする百貨店をも会場として、大阪、京都、神戸、名古屋の各都市で二次展が開催された。

『日本青年新聞』30号(昭和6年12月15日)に掲載された、第5回副展の「要項」によると、出品者は男女を問わず、青年団の関係者であれば誰でも出品することができた。その出品物は「必ず売品に限る」とあり、「売品として、誰が見ても正しいと思はれる値段」を出品者自ら「出品票」に記入しなければならなかった。そして、その売上金は「諸雑費として総額の一割を差引き第二次展覧会終了後」出品者に「送金」されたのである。

このように副展は青年たちの出品した副業品を大都市で販売することを目的としたイベントであった。それでは大日本聯合青年団の求めた副業品とはどのようなものであったのだろうか。前記『日本青年新聞』30号の第5回副展の記事には出品物に対する要望が次のように述べられている。

我々の希望は……先づ、青年の創作的副業とはどんなものか従来、出品者は創作といふ事にかなり捉はれてゐたやうだ。創作といつても、こゝでは何も新奇新案発明といつた、ことごとしいものを求めてゐるのではない、要は青年諸君の製作する品物に青年らしい清新な意気を表はしたい、その形が例へ昔ながらの副業品であつても亦外の誰もが作つてゐる品物であつてもちつともかまはぬ、そこに青年のものを創り出さうとする気持ちが溢れてさへゐれば……出品された品物はみな展覧会場で都会の人々に売られます。そこで品物には一つ一つ高からず安からず誰が見ても当前だといふ値段をつけて貰はねばなりません。「都会人に売る」……こふいふ考へに捉はれて所謂浅はかな都会人向の品物を作ることは控へたいと思ひます。真面目な都会人士は田舎の、地方の堅実な姿を求めて居ります。何よりも大事なことは……これこそ、その地方々々の青年がまごころをこめて作つたのだ！ と肯かれるやうな手固い品物を出品することです。それが吾々の一番希望なのだ。

ここでは創作にとらわれすぎないこと、意図して「都会人向の品物」を作らないことが指摘されている。求められているのは「新奇新案発明」といった大げさなものでなく、「青年らしい清新な意気」が表現されているもの、「地方々々の青年がまごころをこめて作つた」と思われるような「手固い品物」である。こうした方針はその後の展覧会にも引きつがれた。くわえて、『日本青年新聞』55号(昭和8年1月1日)の第6回副展の記事では、「出品物は鑑賞用としてよりも実用品と

して直接われわれの日常生活に役立つものが歓迎」されること、「従来の副業品は主として国内の消費を目的」としていたが、「これから広く海外にも市場を求めて、大いに副業日本の躍進」をはかるため、「これなら海外に向くだらうと思ふもの」、「輸出向」の品物が望まれることが留意点に挙げられており、「輸出向」であっても「実用品」であることが強調されている。また、『日本青年新聞』79号（昭和9年1月1日）の第7回副展の記事では、これまでの方針を踏襲しつつも、「真に郷土色の豊醇に現はれた品物」の出品を呼びかけている。いずれにせよ、「青年自らのものを創り出さうとする清新な気もち」が大切であり、「この精神こそ展覧会の生命」であると結んでいる。

基本的な方針は維持されつつも、回を重ねるごとに、「実用品」や「輸出向」、「郷土色」といった語句が追加されていることがわかる。このような要望に対して、青年たちはどのような副業品を出品したのだろうか。

3. 出品された副業品

『日本青年新聞』をもとにすると、表2から表9までの、第4回から第9回までの入賞者、および宮内省による御買上者のリストを作成することができる。

全体を通してみると、のべ248名の出品者のうち、女子団体、もしくは女子と推察される名前が49名あり、19.7%を占めている。彼女たちは編物や織物を数多く出品しているが、テーブル掛けのような洋風の生活用具が目立つ。また、出品者には農民美術運動の団体が複数みられ、副展が作品発表の場となっていたようである。とりわけ、山口農美生産組合（山口県）、八雲農民美術研究会（北海道）、郷土巧芸（長野県）は3回入賞しており、高い評価を受けていたことがわかる。山形県新庄町の最上共生青年会は農民美術以外の団体として唯一、3回の入賞を果たしている。その出品物はクルミ細工カード立（第6回）、蟹甲面および福だるま（第7回）、風鎮（第9回）であった。また、同会は第7回副展にて、宮内省より福雀柱掛、福雀カード立、福達磨、蟹甲細工の4点、御買上の栄に浴している。

なお、入賞品のほとんどは工芸品であるが、海苔（第5回）やトマトジャム（第6回）、ワカメや凍豆腐（第9回）など食品も見られた。

4. 出品物に対する評価

『日本青年新聞』をもとに出品物への評価をみていくことにする。第3回と第4回については主催者側からの特段の記述がない（資料①・②・③）。しかし、読者評として、辛辣なコメントが寄せられている（資料④・⑤）。東京の米山生という人物は全体を通じて「粗製品廉売会」であるとし、「副業品の製作者、精作せよ」と発奮を促している。一方、もう一人のすゞき生という人物は米山生の意見に同調しつつも、「青年創作展は決して、一部工芸人や職業人のみの独占場ではない」として、「青年団員の真個の生命があふれてゐる以上、たとへそれは出来上りはまづとも、立派な展覧会品であり得るのだ」と一定の理解を示している。第5回については、次のような記述がある（資料⑦）。

購買の経過を眺めると売行の一番は何といても実用品であつた。例えば箒類、盆類、藁細工、竹細工（籠類、花立、箒類等）家庭用木工品等で第二が食料品で、柿、ワカメ、海苔類等は瞬く間に売りつくした。次は装飾品として壁掛、彫刻等であるが玩具も時局に因んだ竹製の機関銃とか、爆弾三勇

士とかの人形が出たが、竹の機関銃は瞬く間に売り払った。人形はこれは今後大に考慮すべきで、女学生等に買はれたが一家を持つた人には余り振り向かれなかつた。これは市内にも既に沢山出でゐる関係からも知れぬ。全体を通じて、値の安いものがどうしても一番に売れるのは不景気で、東京の各デパートが廉売攻めにしてゐるので、都会人の共通の購買心理であらう。

実用品が売れ筋であることや、人形や玩具が不振であることはその後の傾向でもある（資料⑩・⑬）。なお、第6回については審査員の一人である内海一雄が2回にわたり総評を寄せている（資料⑫・⑭）。

第7回には新しい傾向が見えてきた。すなわち、「出品物の一つ一つに、従来に比し非常な堅実味が現れてゐたことで、出品の種類からいつても、玩具や鑑賞品が減つて、実用品が著しく増加し、而もその中に、青年諸君の若々しい創意と素朴さがよく現れてゐた」ことである（資料⑯）。また、この回では展覧会終了後、「今後の指導と、販路の発見並に拡張に資しやうとの見地から、斯界の権威者を招き」、「青年創作副業展出品物批判座談会」が日本青年館で開催されている。

第8回については特段の記述がない（資料⑳）。ただし、この回の主務に携わったのが郷土資料陳列所の大西伍一である〔大西 1936：3〕。第9回については準備段階ではあるが、3つの傾向を挙げてゐる（資料㉑）。まず、「新人の出品の多いことである。その数は例年の例を破つて約三分の二に達してゐる」。つぎに、「郷土色を豊かに盛つてゐるものの出品物の多いこと」。そして、「作品が用途に即してゐる。見かけ倒しや皮相な近代性的な装飾がない。実際の用に即し、そこから形の美が生れ、健康な美が感得される」としている。その結果は、次のようであつた（資料㉒・㉓）。

例年出品される、所謂常連の他に、今年度は新人の多かつた事は非常に喜ばしい。かてて加へて、実用品の増加、郷土色豊かな、そして質朴なものも比較的多かつたことは一般来客の大なる満足であつた。なかにも岩手県のワカメ、凍豆腐、殊に手近なものを副業品とした徳島県出品の南京袋更生敷物、朝鮮よりの莞草手提、莞草スリツパなど好評を博してゐる。然し間々不深切なもの、周到の用意の欠けたものも見受けられたが、総体的に見て好成績であつた。

然しながらこの好成績の出品物は約五分の三位で、未だ大いに考慮すべきものが多々あつた。展覧会は何でも手当たり次第に持込む処ではないといふ事をもつと考へて貰ひ度い。模倣か偶然の一致か疑ふべき殆ど同一と言へる物が、西北両地方から出品されて居るものがあつたが、これ等はお互に、ありふれた材料でありふれた製法に依り、何等の技巧も無く、ありふれた品を作るから、模倣か偶然の一致か疑へるものが出来たのである。あくまで青年自らのものを創り出さうとする清新な気持これこそ青年の生命であり本展覧会の生命であらう。例年同じ物を出品する人もあるが、これらに全然進歩の跡の見られない時は誠に物寂しいものである。最後に、副業品は都会に売捌くのが目的のものでは決してないことを考へなくてはならない。都会向に苦心して出品した物も見受けられたが、都会人の望むものは、質朴な、そして郷土色豊かなもの、又堅実な実用品であると言ふことを念頭に置いて、来るべき第十回の副業展を迎へよう。

9回目にして、ようやく理想の出品物に恵まれたといった感がある。しかし、日中戦争を目前とした時局の中、副展はついに10回目を迎えることなく終焉するのである。

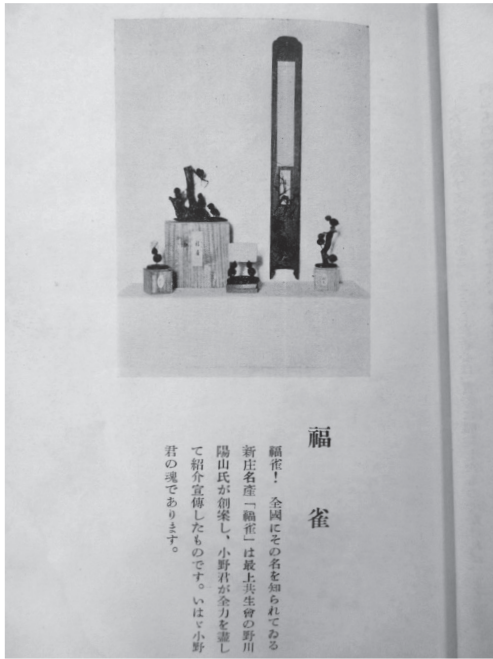


写真1 『故小野恵敏君の靈に捧ぐ』所載の「福雀」



写真2 現代の新庄名産「福雀」(雪の里情報館蔵)



写真3 「福雀」の拡大部

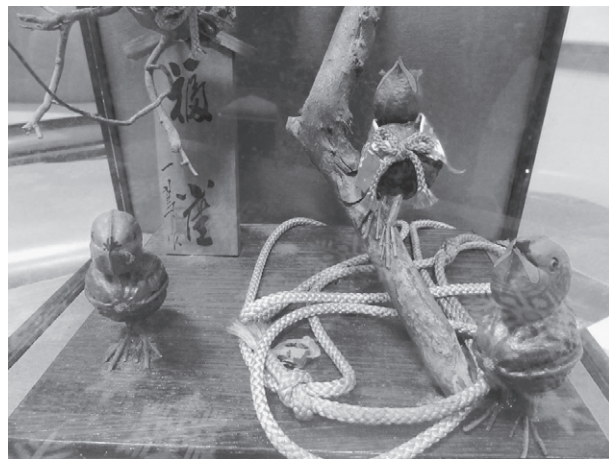


写真4 「福雀」の拡大部

5. 最上共生青年会と「福雀」

最上共生青年会が副展で好成績を収めたことはすでに述べた。御買上となった出品物の中に「福雀」があった(写真1～写真4)。この「福雀」は昭和16(1941)年、日本旅行協会より出された『東北の玩具』に次のようにみえている〔仙台鉄道局1941〕。

福雀(木実応用)新庄町

木の実を応用して作った玩具は色々ある この地でも作られ松の木の瘤を利用したものや松笠を使ったものと随分沢山ある その中で胡桃細工は優れたものと云ふ可きである 二個の実を向をかえて組合せ雀とか雛とかを作つてある 総てが自然物の応用で 割合材料がかゝらず それでみて見るか

らに可愛らしい処が何によりである。
年に二万余個の産出をすると云ふから大したものである。

これを新庄名産品として、全国に宣伝、紹介した人物こそ最上共生青年会の創設者の一人、小野恵敏であった。「三十にもならぬ若さで」早世した彼の業績は『故小野恵敏君の霊に捧ぐ』（雪の里情報館蔵）という追悼文集にまとめられている〔図司 1937〕。同書から小野の人物像と最上共生青年会、ならびに「福雀」に関する特筆すべき部分を抜粋しておきたい。

「序」 松岡俊三

小野恵敏君は真面目で、純情生一本で、責任感が強く、不言実行の青年だつた。殊に自分が何より関心したのは、若い者に似ず深く宗教を信じてみたことだ。

小野君の大きな業績は、雪害救済運動の第一線に活躍したこと、地方産業の開発に、渾身の勇を振るつたことであらう。

昭和三年新庄町で雪害救済運動を提唱した際、まづ先に共鳴し、青年層に働きかけて、熱心な運動を起し、「最上郡雪害解決期成連盟」の礎石を築いたのは、取りも直さず君であつた。その後君は常に勇敢に、青年雪害運動の第一線に活躍してゐた。

君は又熱心な、地方産業の開発者であつた。新庄の福雀か、福雀の新庄かとまで、福雀を全国的に紹介し、宣伝した君の功績は、実に顕著なものと感心に堪へない。大日本青年団の一人一研究を實踐し、同団を訪ひ上京することも再三であつたが、その都度自分を訪れて、色々な産業上の意見を述べてみた。青年には珍しく見聞が広く、将来を見透してゐるのに敬服した。

然しながら自分の最も君に敬服してゐるのは、仏教の帰依者であり、実践家であつたことだ。仏教を信ずる事が深かつたばかりでなく、日常の行動にそれを実践した君のまじめさには、自分は衷心から感服してやまない。

小野君は三十にもならぬ若さで逝いた。新庄町にとつても、最上郡にとつても、山形県にとつても、大日本青年団にとつても、非常に大きな損失であつた。あの若さでは申し分のない業績であつたが、ほんとうに力あり、実のある働きはこれからだつたと思ふ。全く惜しいことをしたものだ。

「最上共生運動と小野君」 林林三

文学博士椎尾辨匡師が共生の大旗を鎌倉に掲げたのは大正十一年六月であつた。新庄町接引寺住職花車圓瑞師は「これ仏教の精髓」なりと共鳴し、直ちに鎌倉に馳せ参じて全国指導者共生結衆に加はり、帰新後直ちに新庄共生会の組織に着手された。

当時小野君は宿痾の肺疾患に悩み、病床に横はつて鬱悶の日を送つてゐた際だつたが、椎尾師表の「今日真に生きるものは永遠に生きるものである。今の充実、今の喜び、今の命に生き、今の業務に生きよ」と力強く叫ぶ声が、永遠に生きる道を求めて止まざりし小野君の心琴に触れたのである。それが共生運動を通して仏教の大道に入信の動機であつた。

何としても小野君の活動の華々しかつたのは産業方面である。昭和九年三月三十日大日本聯合青年団理事大西伍一氏が、郷土資料収集行脚に来られたのを共生会に引き留めて副業座談会を開き、併せ

て郷土資料を陳列したが、これが新庄町発展に如何に重大な一石であつたかは二年後に至つて人々を驚かした。

小野恵敏君の名を想起するものは福雀を想ひ、福雀を眺めては小野君の在りし日の姿を画く小野君の功績として共生史上に又、最上郡の産業史上に、残した大きな足跡は、何としても福雀に対するあの努力であらう。共生会は「産業、教育、芸術への躍進を期す」これをモットーに掲げた。産業への関心は共生会を挙げての関心であり、これが凝つて野川徳太郎氏の福雀創案となつたが、積極的に販売製作に乗り出したのは、昭和七年九月二十五日最上共生青年会委員会の決議に基いてである。同日直ちに実用新案登録申請を為すと共に、野川氏を製作指導者として、上島保右エ門氏を販売取扱人として郷土芸術品「福雀」が華々しくデビューしたのである。

製作、指導、販売の一切に涉つて整然たる統制のもとに、上島、野川、小野を一線に、背後には花車師をはじめ、共生同人の努力は報ひられて、躍進に次ぐに躍進を以てし其の名漸く全国に高く、昭和八年四月七日共生会総会に於て、販売の一切を小野君に委託する事となつた。

これより小野君は、福雀を一身に担つて活躍し、全国副業品展覧会出品の福雀を皇后宮職より御買上げの光栄に浴する等声価益々高く、四月十七日には初めて米国への輸出向福雀三百個の注文に接する等注文殺到し、五月一日には広く製作者を募集して講習会を開く等、小野君は東奔西走、健康を気遣はるゝ程であつた。

彼は決して商売上手ではなかつた。販売方法に於ても計算技術に於ても、彼自ら言つてゐる通り素人であり下手でもあつた。然しながらあれ程の成績を挙げ得たのは唯かに熱誠そのものであつたからに外ならない。丁度入梅にかゝつて、黴の生へた福雀を数百個かゝへて泣顔作つて、遂にそれを処分し兼ねたのなどは、その間の事情を物語つてゐるが、彼の熱心さには実に驚くべきものがあつた。総べての行動が熱意で押し通した。

小野君は元來非常にきかぬ気の男であつたらしい、然し極めて純情の男であつた。彼は純情の余り融通性を欠き、彼の直情径行は時として誤解を招き其の爲めに、幾度か同人との間に紛争を起したが、彼の熱誠が認められて、遂に事なきを得たのは一再にして止まらない。斯ふした傾向は昭和九年頃まで続けられたが、新興の円熟するに連れて玲瓏たる状態となり内に火の如き熱意を蔵しながら物柔らかに時により、ユーモアを飛ばしながら接する小野君の姿を見るやうになつた。

彼の偉大さは死の瞬間にあつたと思はれる。すつかり任せ切つたあの態度、御念仏を唱しつゝ静かに静かに死んで行つたところに彼の真面目がうかがはれる。

「産業に熱心だつた小野君」 齋藤庫治

青年団は本来の意味から言へば、精神の修養と心身の鍛錬に努め、共同訓練と団体行動によつて、規律と統制を啓培するのが主目的である。

然るに社会思想の変化と、経済恐慌の深化に伴ひ、社会階層に青年の全面的奮起が、力強く待望されるに至つた。わけても産業分野に於ける青年の開拓と活動は、大日本青年団の一人一研究となつて具体化し、系統青年団に産業部の設置とまで発展した。

そこで我が新庄町青年団に於ても、大いに一人一研究を奨励し、産業部の充実と発展に力を注いだ。各青年団で催してゐる品評会や共励会のやうなものゝ外に、地方色の濃厚な研究が盛んに行はれた。即ち大日本青年団に出陳された佐藤太吉君の「下駄の研究」や小田島寅蔵君の「亀綾織の研究」

などがそれである。

小野君は当時新庄町北部の支部長であつて、極めて熱心に産業部の発展興隆に尽力した。殊に町当局と提携して、各地の産業を視察し歩くと共に、新庄町の産業に付て、色々と調査研究した。そして晩年には東山の陶器の発展について、大いに尽策してゐたものだ。

「一身を犠牲に産業発展に努む」 佐藤太吉

昭和六年のことだつた。当時新庄町中央部には、青年団員が殆ど居らなかつたので、小野君と僕とは何とかして、中央部に分団を設置したいものと考えた。そこで二人は話し合ひの上、手分けして戸毎に勧誘することにして、あらゆる純情と熱意とを以て説き廻り、約一ヶ月ばかりで二十名近くの加盟団員を獲得して、発会式を挙げるに至つた。

丁度その頃、山形県連合青年団の総会が、我が新庄町に開催された。小野君と僕の二人は、こうした機会に、郷土の産業を全県下に紹介宣伝しやうと相談し、前後三日間「最上郡物産即売会」を開催した。一口に言へば極めて簡単だが、最上郡物産を集めて陳列し、それを販売するには、馴れぬ僕達には、仲々容易なことではなかつた。しかし結果は予期以上の成功だつたので、二人は非常にうれしかつた。

この即売会が機縁となつて、小野君は益々産業部の開拓と発展に力を注ぎ、殊に「福雀」や「福だるま」などの、新庄名産くるみ細工が、一小野青年の力によつて、全国的にまで其の名を知らるゝに至つた。そこで町の職業を持つた青年達も、青年団を再認識し、青年団はお互ひに協力して、商業上の向上や研究にも、極めていゝ機関であるといふ考へを起し、入団するものが頓に増加した。

小野君は更に大日本青年団に、新庄町の産業部を紹介すべく決意し、第六回全国青年副業創作展覧会及一人一研究展覧会へ「福雀」を出品した。それが非常な好評だつた。これに勢を得て更に研究を加へ、第七回展覧会には第十位に、第八回には第三位にまで飛躍し、畏くも皇后職の御買上げに浴するの光榮を担つた。

その頃から僕は、小野君に力づけられて、職業を通して一人一研究に志した。「新庄地方に於ける履物の変遷と、其の研究と標本」がそれである。これは着手から三年目に漸く完成して大日本青年団の「郷土資料陳列所」へ永久保存となつた。同時に「新庄町青年履物加工組合」も結成された。

小野君はこうした産業上の問題には、素晴らしく熱心だつた。早朝から夜遅くまで、一心不乱に活動した。それに頗る研究的で、絶えず改良進歩に専念した。新聞、雑誌、新刊書等により、いろんなことを様々に工夫した。そうした工夫は作品に新生命を吹込み、常に生氣潑刺として、各方面の絶賛を博さしめた。

小野君は産業熱心だつたばかりでなく、非常な精神家だつた。仏教の篤信家であり、宗教の実践家だつた。だからどんな些細なことにも、全力を尽し、全精神を打込んだ。例へば内務省の「全国交通調査」に青年団が参加した時の如きは、早朝五時から夜九時まで、ブツ通して綿密な調査を行つた。その労力奉仕によつて得た若干の金で、明治大帝行幸紀年碑の脇へ、県下第一の大国旗を樹立掲揚した。

小野君については、語るべきことが余りに多い。僕と小野君は兄弟よりも親密だつた喜びも悲しみも、お互ひに分け合つて励まし、励まされたものだ。たゞあの通り小野君は、瘦身長体でとかく病氣勝だつたが、僕はこの通り、煮ても焼いても病氣一つせぬほどの頑丈な身体である。若し僕健康の一部を分与し得たら、三十にも達せぬ若さで、小野君を喪ふの不幸は見ずに済んだであらうと思ふ。僕はまゝならぬ運命の神を呪はずに居られない。

以上を要約すると、小野は雪害救済運動と新庄町の産業発展に尽力した。「福雀」の創案者は野川徳太郎であったが、「新庄の福雀か、福雀の新庄か」と言われるほどに「福雀」の宣伝、紹介につとめた。宿痾の肺疾患から仏教の「帰依者」、「実践家」となった小野は新庄町接引寺住職、花車圓瑞が組織した新庄共生会を拠点に、「共生運動」に参加した。最上共生青年会という名称の由来は判然としませんが、このことと関係しているように思われる。

この「青年団」の創設は昭和6（1931）年に遡る。当時、新庄町中央部には青年団員がほとんどおらず、分団の設置を考えた小野と佐藤太吉が団員を戸毎に勧誘して発足した。同じ頃、山形県連合青年団の総会が同町で開催された際、二人は「郷土の産業を全県下に紹介宣伝」するため、「最上郡物産即売会」を3日間にわたり挙行している。「福雀」をはじめとする胡桃細工が隆盛するとともに、入団者も増加した。

大日本聯合青年団とのかかわりは昭和8（1933）年、新庄町の産業部を紹介すべく、第6回副展に「福雀」を出品してからである。翌年3月には郷土資料収集のため同町を訪問した大西伍一を「共生会」に引き留め、副業座談会を開いている。以来、郷土資料陳列所への資料の寄贈はもとより、副展および一人一研究資料展覧会への出品、「新庄町青年履物加工組合」の結成など、青年たちの活発な取りくみがみられるようになる。しかし、小野の急死、正確な没年はわからないが、それを境に最上共生青年会の活動も急速に低下していったようである。それは日中戦争が間近に迫り、副展それ自体が開催されなくなった頃であった。

6. おわりに

雪の里情報館での聞き取りによると、「福雀」はかつて、新庄市内にあった人形店で製作され販売される等していたが、現在では当該人形店も継承者がなく途絶えており、個人的に製作していた人達も高齢化し、現在は「福雀」は見受けられなくなったという。

昭和50（1975）年3月12日発行の山形新聞夕刊（2面）に「絶やさぬクルミびな ひとすじにつくり育てた「福雀」最上民芸」という見出しで、新庄市本町の田中栄一氏（当時71歳）が紹介されている。この人物は第8回副展の御買上者として名前のあった「最上共生青年団販売部 田中栄一」氏であろう。記事には「青年たちの活動として新しい最上の民芸品として開発しようと能面師初代野川陽山さんの協力で考案」されたことや、海外に販路を求めたことなどが記されている。

本稿では副業品の研究に青年たちがどのように取りくんだのかを、副展に焦点を当てながら追跡した。入賞者についてみると、複数の農民美術の団体が作品発表の場としていたことや、女子青年の活躍がみられたことが明らかとなった。また、出品物は販売を前提として、実用品が求められ、中には食品も含まれていた。

最上共生青年会の活動についてみると、その創設者の一人である小野恵敏の功績がきわめて大きいことが明らかとなった。「福雀」は彼が宣伝、販売につとめたものである。大日本聯合青年団とのかかわりは昭和8（1933）年、第6回副展にそれを出品してからであるが、翌年、郷土資料陳列所の大西伍一が新庄町を訪問して以来、同会の活動が活発になったことが明らかとなった。

小野恵敏は「雪調」生みの親である、松岡俊三代議士との接点があった。その「雪調」は山口弘道所長のもとで、昭和12年以降、民藝運動との結びつきを強めていく。ただし、山口のねらいは農村工業の振興にもとづく地域経済の更生にあり、その考え方は大日本聯合青年団の副業品の生産奨励に近いものであった。このように考えると、最上共生青年会の活動は「雪調」に民藝運動を誘

致する下地を提供した可能性がある。しかし、「雪調」と最上共生青年団との接点は未だ見出すことができていない。今後の課題としたい。

注

- (1) 佐藤太吉による『日本履物発達史』（研究記録）と「下駄製造の順序を示す写真と模型」、小田嶋寅蔵による「投杼式織機三分の一模型」、小野恵敏による「新庄町写真並に絵葉書」と「雪国救済問題一覽外図表四点」のほか、べんけい、女子用もんぺ、□べら、莫蔭帽子、綿入手袋、革手袋などの実物資料を抽出することができる。
- (2) 脱稿後、雑誌『青年』12巻12号（1927年）から18巻5号（1933年）に第1回より第6回までの副展関係記事が掲載されていることがわかった。今後の調査を期したい。

参考文献

- 及川清秀 2003「経済更生運動と民芸運動—積雪地方農村経済調査所の活動から—」神奈川大学 日本経済史研究会編『日本地域社会の歴史と民俗』雄山閣
- 大友儀助 1999「農林省積雪地方農村経済調査所について」『最上地域史』21
- 大西伍一 1936『農村副業の要訣』明文堂
- 小田嶋寅蔵 1936「郷土特産亀綾織の研究」大日本聯合青年団郷土資料陳列所『郷土工芸に関する研究報告』大日本聯合郷土資料陳列所
- 熊谷辰治郎 1917『大日本日本青年団史』熊谷辰治郎
- 今野咲 2016「積雪地方農村経済調査所におけるデザイン振興策—1930年代の農村工芸品をめぐる諸相のなかで—」『デザイン理論』69
- 関司安正 1937『故小野恵敏君の靈に捧ぐ』関司安正
- 仙台鉄道局編纂（西澤笛畝編）1941『東北の玩具』日本旅行協会
- 大日本聯合郷土資料陳列所 1936『郷土工芸に関する研究報告』大日本聯合郷土資料陳列所

『日本青年新聞』副業関連主要記事

【主要記事一覧】

資料番号	号数	発行日	見出し	著者	備考
①	1	1930.4.15	時代の要求に適した副業展と生活合理化展…盛会裡に幕を閉づ…		
②	15	1931.5.1	進歩の跡著しき青年創作副業品展と一人一研究資料展覧会		
③	17	1931.6.1	大阪で盛況の副業展と一人一研究展 第二陣		
④	19	1931.7.1	副業品も亦精製品たれ	東京 米山生	青年春秋（読者投稿）
⑤	20	1931.7.15	副業展覧会の真使命	すゞき生	青年春秋（読者投稿）
⑥	30	1931.12.15	逐年と反響増大の二つの展覧会 実施計画決定		
⑦	38	1932.4.15	青年の作品は光る 傑作二十八点の創作副業展		
⑧	40	1932.5.15	若葉の京都に 盛大をきはめた第二次創作副業展		
—	48	1932.9.15	農村副業品の海外進出をめざして 第一回輸出品向展覧会開かる		
⑨	55	1933.1.1	副展と一人一研究展 第六回青年創作副業品展覧会		
⑩	61	1933.4.1	愈々近づいた郷土週間 非常時局を反映した大会議題と出品点数二万点突破の副業展の盛況		
⑪	63	1933.5.1	郷土色豊けき青年の創作副業展覧会 大官名士の来観相継ぐ		
⑫	63	1933.5.1	創作副業展大観（一）	内海一雄	農林省農林技師 副展審査員
⑬	64	1933.5.15	神戸市に開かれた副展第二次展の盛況		
⑭	64	1933.5.15	創作副業展大観（二）	内海一雄	農林省農林技師 副展審査員
—	71	1933.9.1	副業としての趣味竹細工	松田竹材工藝研究所長 松田鐵太郎	学芸欄
⑮	79	1934.1.1	副業展と一研究展 来たる四月と五月 東京都名古屋に華々しく開催 団員諸君の盛なる出品を望む		
⑯	87	1934.5.1	空前の大盛況 愈々面目躍如たる創作副業品展覧会		
⑰	89	1934.6.1	この光栄！ 宮内省の御買上に輝く本団副展出品の数々		
⑱	102	1934.12.15	二つの展覧会と郷土舞踊 実施大綱決定		
⑲	104	1935.1.15	産業日本に先駆する副展・一人一研究展 全国団員待望裡にいよいよ近づく		
—	104	1935.1.15	郷土工芸を語る	藤井達吉	学芸欄、工芸家
—	106	1935.2.15	輸出向副業品の話	山中省三	学芸欄、日本産業協会主事 副展審査員
⑳	110	1935.4.15	青年創作副業品展覧会と郷土舞踊民謡大会に賑つた本団郷土週間の盛況		
㉑	111	1935.5.1	（無題）		副業欄
—	112	1935.5.15	（無題）		副業欄
—	113	1935.6.1	副業青年としての修養		副業欄
—	114	1935.6.15	副業を始める迄		副業欄
—	115	1935.7.1	輸出手芸品の話		副業欄
—	116	1935.7.15	「手」の勝利		副業欄
—	118	1935.8.15	埋もれた宝		
—	133	1936.4.1	輸出向の副業品に就いて	農林省副業課長 五十子卷三	学芸欄
㉒	134	1936.4.15	副展の出品締切迫る！！ 創意になる作品を一奮つて送付されよ—		
—	134	1936.4.15	輸出向の副業品に就いて（承前）	農林省副業課長 五十子卷三	学芸欄
㉓	136	1936.5.15	郷土色を盛つて華々しく開かれた青年創作副業品展…都人士の人気をあつめる…		
㉔	137	1936.6.1	副業日本の豪華版 満都の人気を集めた本団副展の盛況		
㉕	145	1936.10.1	副展回顧資料と農村工業化参考資料の陳列 一人一研究展に附設		
㉖	150	1936.12.15	第十回青年創作副業品展覧会は明年秋期に開催されん—一人一研究展と同時に—		

【第4～9回青年創作副業品展覧会入賞者および御買上者一覧】

表2 第4回青年創作副業品展覧会入賞者

品名	住所	氏名(団体名)
折畳式傘置台	東京	井上春雄
毛糸手編器(甲号)	同	萩原榮一
壁掛	同	森英作
兎の餅搗	京都	桂秀雄
鏡掛	京都	樹田國太郎
帯(菊模様)	京都	窪田岩松
ハンモック	大阪	三野郷村処女会
両山二個総フレンチ	同	中島ヤスエ
匏(八寸)	兵庫	三木町青年会
麦稈細工(4)	同	大久保女子青年団
糞虫草履	同	久下村女子青年団
ビク	同	藤原左門
ツルベ形花籠	新潟	富澤末吉
白樺スキー人形	群馬	草津青年団
カベ掛	同	同
竹細工ザマ	同	都丸宗平
短柄箒	同	中村政伊
布子	同	大澤大
鳥籠	同	中村邦夫
高崎表	同	後閑増雄
配達籠	同	長崎松次
シヤウキ	群馬	柘澤守
月形ヤチヤラ	同	千葉清内
真綿	同	清水さと
長柄蜀黍箒	千葉	平山廣
藁製櫃入	栃木	小川榮作
真綿チヨツキ	同	黒尾マサ 大貫ミヨ
伊勢人形(高砂)	三重	竹内正男
伊勢人形(万歳楽)	三重	齋藤利生
イヅミ	愛知	岡村義光
花壺	同	加藤春巖
大熊手	同	水野軍治
夏目丸形急須	同	濱野勝蔵
富士巻狩煙草盆	静岡	古瀬甲子郎
箕	同	大胡田清作
竹行李	同	勝又恵造
丸形炭籠	同	外山武雄
毛糸羽織	同	熊澤里子
麻糸袋	同	同
瓢細工(入皮花生、置花生瓢)	滋賀	瀬川元治郎
屏風柿漬	岐阜	酒井武夫
木彫カフス釦	長野	武舎頼雄
真綿胴着	同	長田とし
伍助駒	宮城	勝又頼治
ゴム裏草履	秋田	常盤村女子青年団
雛人形三種	鳥取	鳥取土俗玩具研究□
ネクタイ掛	島根	石津義隆
ビール籠	同	長見幸一
竹玩具(手長猿、象、馬、兎)	岡山	木村勝彦
ステツキ立	同	同
竹玩具(バツタ)	同	橋本敦夫
大内人形	山口	金重満
筵	同	宮崎スミコ
巻蓑入	香川	矢野坂宇一
シヤツ	愛媛	正岡富子
馬(土偶)	高知	森木虎喜
飯櫃入	同	山本林
飯櫃入	同	高知木工伝習所
曙漬	同	安田女子青年団
着替人形(桃割)	同	岡西般恵

品名	住所	氏名(団体名)
改良雨傘	福岡	中村正二
座布団地	沖縄	沖縄県青年団
葡萄蔓細工	青森	工藤武雄
長柄箒	同	三上繁勝
木彫人形(山路)	同	千葉季彦
クルミ人形	同	桑田美智芳
糞虫応用二ツ折	愛知	犬飼由紀子
毛糸編膝掛	同	犬飼由紀子
帯	同	山口しづゑ
鏡掛	同	小畑秀
ツマゴ	岩手	二子村青年団
蕃族人形	台湾	台湾物産紹介所
木ノ葉人形	同	同
月桃座布団	同	同

資料：『日本青年新聞』15号(1931年5月1日発行)をもとに作成

表3 第5回青年創作副業品展覧会入賞者

品名	住所		氏名(団体名)
熊マスク(壁掛)	北海道	山越郡八雲町	八雲農民美術研究会
バニクラパイプ	青森県	青森市栄町	西館彌輔
羽子板	秋田県	仙北郡角館町女子青年団	吉田キミ
高崎表	群馬県	高崎市若松町	前田吉三
小箱	東京府	駒〇町新町三七五林方	富岡貢
玩具(機関銃)	神奈川県	津久井郡川尻村トハタ郷土美術研究所	八木義明
雛人形	同	足柄下郡湯本町	白川博
銘々盆	山梨県	南巨摩郡鰺沢町	鰺沢町女子青年団
遠近法応用額縁(スキー小舎)	長野県	埴科郡倉科村一、四七一	近藤善久
果物鉢	同	小県郡県村西海町	宮下房雄
テーブルクロス	同	小県郡和村副業工芸研究所	富岡泉
楓人形	同	下伊那郡川路村	中島繁男
瓢箪酒入(二合入)	愛知県	知多郡岡田町	濱野勝蔵
ミシンカヴァー	同	名古屋市西境町処女会	山田ふみ子
テーブル掛	同	名古屋市和敬処女会	加藤貞子
藁縄	同	知多郡鬼崎村	伊藤榮
レース編クッション	兵庫県	神戸市港西区須佐野通四丁目	須佐処女会第一処女会
糊染応用壁掛	同	神戸市西灘小学校	山口慶
竹製花筒	岡山県	津山市	木村勝彦
海苔	山口県	玖河郡和木村	和木村青年団
漱石の猫	同	山口市外大内村	山口農美生産組合
雑木ステッキ(桜)	高知県	高知市木履屋町	長野進造
根付盆	福岡県	粕屋郡勢門村若杉	安河内實
真綿糸	熊本県	阿蘇郡山西村	山西屑繭加工組合
投入籠	鹿児島県	鹿児島市鍛冶屋町	吉村善雄
花籠	同	鹿児島市〇の口町	石川籟泉
クバの船	沖縄県	浅草区田中町	矢賀宗友
改良吠	朝鮮	京〇〇〇郡東面〇足	陳光烈

資料：『日本青年新聞』38号(1932年4月15日発行)をもとに作成

表4 第6回青年創作副産品展覧会入賞者

品名	住所		氏名(団体名)
熊時計台	北海道	山城郡八雲町	八雲農民美術研究会
クルミ細工カード立	山形県	最上郡新庄町	最上共生青年会
丸掃籠	同	東村山郡高楯村	押野峯吉
菱ノ実細工獅子舞	埼玉県	比企郡松山町	松山愛郷芸術会
醬油縄	同	北葛飾郡吉川町	石綿芳雄
竹細工楊枝入	東京府	荒川区尾久町	深井良治
手付投入花籠	長野県	諏訪郡玉川村	諏訪高原農美生産組合
手付一輪挿花籠	同	同	同
果物入	同	同	同
竹椽取雛人形	同	小泉郡泉村	郷土巧藝社
朴浮彫□刻短冊差柱掛	同	諏訪郡下諏訪町	諏訪農美生産組合
ブツクエンド	同	少泉郡押川村	中村實
白樺スケッチ額	同	松本市上土町	藤野忠清
テーブル掛	同		富岡ひで子
巻煙草入	岐阜県	恵那郡中津町	辻村正雄
ペン皿	同	同	同
鶉	同	賀茂郡東白川村	白川農美生産組合
桐製鶉飼きざみ入	同	郡上郡八幡町	藤田喜好
鶉飼柱掛	同	同	同
根付	静岡県	小笠郡中村中	林榮一
火鉢	愛知県		亀井六郎
藁縄	同		伊藤榮
昼夜帯	同		蟹江女子青年団
面	同		夏目金一
宝槌	三重県	度会郡田丸町	平松秀郎
桜花人形	滋賀県	阪田郡醒井町	上田溪仙
花瓶	滋賀県	甲賀郡信楽町	西尾辰治
トマトジャム	滋賀県	阪田郡六荘村	六荘村処女会
竹籠花器	京都府	久世郡宇治町	吉岡重雄
卓掛	同	北桑田郡山国村	江口九一郎
ネクタイ	同	熊野郡神野村	森本華雄
算盤手帳	兵庫県	美囊郡三木町	藤田三郎
飯籠	同	美囊郡添河村	芝田義信
シヨール	同	神戸市連合処女会	三井幸子
テーブル掛	同		石井鶴枝
テーブル掛	同	々	湊山処女会
ソリードハンドバック	同	々	村岡春子
松皮細工	鳥根県	簸川郡塩治町	布野昂五郎
大蝦	岡山県	津山市	津山市津山竹工販売利用組合
木彫人形(山人)	山口県	山口市外大内村	山口農民美術生産組合
木彫大内人形	同	同	同
四季の帯	香川県	木田郡川島町	宮崎フサ
松皮柱掛	同	木田郡屋島村	廣瀬孟明
生花籠	愛媛県	上浮穴郡仕七川村	片岡元則
松皮細工(鶴)	高知県	伊野郡吾川町	森本虎喜
女学生ジャンパー	樺太	元泊郡知取町	高津十代
風俗人形	朝鮮	元山府榮町	長澤榮治

資料：『日本青年新聞』63号(1933年5月1日発行)をもとに作成

表5 第7回青年創作副業品展覧会入賞者

品名	住所	氏名(団体名)
ネクタイ掛及びブックエンド	北海道	八雲農民美術研究会
蟹甲面および福だるま	山形県	最上共生青年会
靴の中敷草履	同	田村春吉
ネクタイ掛	長野県	漆芸工人会
魚ペーパーナイフ	同	副業工芸研究所
果物入	同	諏訪農業生産組合
木皿、五枚一組	同	郷土巧芸社
ビール盃	同	日本農美生産組合
白樺カレンダー台帳	同	川路農美生産組合
積藁煙草セット	同	副(ママ)工芸研究所
浴場マット	岐阜県	西川静
かはせみの木彫	同	県立加茂農林学校
生地木彫村娘	山口県	山口農民美術生産組合
丸茶	同	富加副業竹細工組合
鳥形ブックエンド	滋賀県	上田勝一
花瓶	同	西尾辰次
木彫構成雛	同	上田溪仙
刺繍帯	石川県	吉本かをり
枳の実カード立	埼玉県	高橋いなち
竹椅子	同	野島孝雄
竹製電燈笠	東京府	横倉直吉
投入花籠	同	櫻井正男
毛筆	愛知県	白井金一
猪の木彫	三重県	坂本重三
寸胴形白竹製花籠	同	中島米吉
白紬	京都府	森本筆雄
飯籠	兵庫県	宮田正利
文庫	同	鷺尾しづ
レース編テーブル掛	同	寺井蔦子
ハンドバック	同	櫻井静子
網代文庫	広島県	山田孝志
花台	岡山県	長尾勇
ホームスパン	香川県	昭和村緬羊組合
樂々織	同	飯田静子
子供チヨツキ	宮崎県	赤木タマ
莞草スリツバ	朝鮮	鮮光副業組合

資料：『日本青年新聞』87号（1934年5月1日発行）をもとに作成

表6 第8回青年創作副業品展覧会入賞者

住所	氏名(団体名)
青森県	小井川潤次郎
〃	菊地セツ
福島県	齋藤猪三
栃木県	高村後太郎
〃	川連寛一
埼玉県	飯島好作
長野県	佐藤義博
〃	山口佐平
岐阜県	船戸與三郎
愛知県	常滑町青年団
滋賀県	西尾卯吉
兵庫県	杉本忠幸
〃	荒木赳
〃	久保田壽一
山口県	山口農民美術生産組合
長崎県	千々石女子青年団
朝鮮	李昌國
埼玉県	井桁よね
石川県	生山富士子
神奈川県	片野延次
樺太	早川謙六
青森県	松野敏夫
山形県	押野峰吉
神奈川県	廣瀬富治
〃	門松伊之助

資料：『日本青年新聞』110号（1935年4月15日発行）をもとに作成

表7 第9回青年創作副業品展覧会の入賞者

品名	住所	氏名(団体名)
カラー入	青森県	光城農事実行組合農閑工芸部
岩手ワカメ	岩手県	女子青年団
凍豆腐	岩手県	青年団二子町支部
人形(農婦)	秋田県	樋渡義一
ブックエンド	秋田県	佐藤省一郎
風鎮	山形県	最上共生青年会販売部 田中榮一
箒	栃木県	桐生富次郎
時計型煙草盆 B	群馬県	栗原富次郎
角籠	群馬県	久保田貞男
半襟入箱	埼玉県	石川静一
二宮金次郎	千葉県	豊蔵千二
手織ハンドバツク	東京府	小川清子
ホームスパン	同	同
クツシヨン	同	同
挽物煙草入	東京府	森勸介
信州四ツ結盛籠	東京府	佐々木空三郎
花籠一号	新潟県	金子甚一郎
色紙入箱 A	長野県	坂口三雄
花器(蓋付)果物皿	長野県	諏訪高原農美組合
ネクタイ掛(木兎)	長野県	郷土巧芸社
壺	長野県	小山元重
宝石入 B	岐阜県	辻村正雄
皿敷(七吋)	静岡県	中村博
板付タワシ	同	同
肥料吠	三重県	伊藤清次
千段型コーヒーセット	滋賀県	加藤正一
スタレ	滋賀県	森田庄助
木彫□(上)	滋賀県	清水竹春
丹波紙団扇	京都府	水口勇
綿製テーブル掛	和歌山県	海堀義夫
隠岐ワカメ	鳥根県	嘉見伊勢太郎
木彫換栓	山口県	福島悦心
南京袋更生敷物	徳島県	松田操
文鳥灰皿	佐賀県	北川美則
亀(竹根)	鹿児島県	石川籟泉
自然丸硯	朝鮮	□原公立普通学校
莞草スリツパ(斑色)	朝鮮	鮮光副業組合
莞草手提(一号)	同	同

資料：『日本青年新聞』137号（1936年6月1日発行）をもとに作成

表8 第7回青年創作副業品展覧会の御買上者

品名	住所	氏名(団体名)
熊のブツクエンド	北海島	八雲農民美術研究会
熊ロツテイング	同	同
竹製竹駒乗	宮城県	岩沼町青年団
田子作人形	同	木村信夫
薪負人形	同	木村信夫
柱掛竿灯	秋田県	旭北青年団
松笠細工三点	山形県	荒木久松
福雀柱掛	同	最上共生青年団
福雀カード立	同	最上共生青年団
福達磨	同	最上共生青年団
蟹甲細工	同	最上共生青年団
白木彫招猫	千葉県	農美生産組合農蔵千二
丸形	同	農美生産組合農蔵千二
丸形金魚	同	農美生産組合農蔵千二
木彫吉見人形麦踏	埼玉県	篠田吾郎
多摩川セード	東京都	横倉眞吉
影絵盆インクスタンド水盤	長野県	漆芸工人会
ネクタイ掛	同	佐藤朴松
インクスタンド	同	郷土巧藤(ママ)社
梢人形	同	蓼科農美生産組合
郡上風俗人形	岐阜県	熊田力造
かはせみ	同	県立加茂農林学校木彫部
桃太郎	同	県立加茂農林学校木彫部
竹馬兎	同	県立加茂農林学校木彫部
子守鶴楊枝入れ	同	東白川青年団
丸木だるま	同	東白川青年団
柱掛	福井県	建石作太郎
卓掛レース編テーブル掛	兵庫県	大田律子
テーブルセンター	京都府	森本筆雄
猪	三重県	坂本重三
木彫野猿	同	櫻谷直弘
花生瓢	滋賀県	瀬川元四郎
手提	岡山県	白髪義男
角形巻煙草入	同	井上圭介
赤間関硯四点	山口県	坪井美和
炭取籠	同	守田正志
鯉幟	徳島県	岩上竹星
書類入	愛媛県	片岡元則
果物入	同	同
生花籠	同	同
船形花生	高知県	篠原徳吉
陶器製宝船	同	後藤瀧蔵
四方形懸崖衣類入	鹿児島県	石川巖泉
木彫□□□	朝鮮	長澤榮治

資料：『日本青年新聞』137号(1936年6月1日発行)をもとに作成

表9 第8回青年創作副業品展覧会の御買上者

品名	住所	氏名(団体名)
鮭負熊	北海道	八雲農民美術研究会
目屋人形(炭負姿)	青森県	目屋民芸研究会 沢田長次郎
センター	青森県	光城農事実行組合農閑工芸部
一輪差	山形県	涌井彌瓶
蟹甲面ボール箱入	〃	田中榮一
絹毛交織夏帯	福島県	菅野榮
足ふき	〃	茨城県連合青年団
短柄箒	栃木県	倉持實
投入花瓶	〃	松下勝夫
緞通一畳敷	〃	川連寛一
バスマット	〃	川連寛一
時計型煙草盆C号	群馬県	栗原富次郎
木彫子守	埼玉県	埼玉手工芸研究会 篠田吾郎
縁台A	〃	野島孝雄
□網中	千葉県	串濱分団
二宮金次郎	〃	〃
リス	〃	〃
□製楊枝立	東京市	櫻井正男
手桶花盛	〃	深井良治
燈籠形手洗器	〃	青山正勝
花瓶敷	〃	世田谷商工青年団
千成へちまふとん キャンプ用型	〃	三穂翠子
ベビーセーター	〃	中村古里
植木鉢カバー(上)	神奈川県	周東昌一
〃(下)	〃	〃
二号花籠	新潟県	金子甚一郎
女スキー	新潟県	藤井八太郎
越後獅子	〃	〃
竹彫茶籠	富山県	多田武
二宮金次郎	福井県	建石作太郎
兎(柱掛)	〃	〃
旅人	〃	〃
更生だるま	山梨県	芹澤文蔵
甲斐犬	〃	〃
天狗像	〃	〃
玩具フクロ	長野県	内堀篤右衛門
古代煤竹製電気覆	〃	児玉鳳翠
黒竹籠電気笠	〃	児玉鳳翠
帯止	〃	日本農美生産組合 中村實
果物盆A	〃	土屋武重
帯止	〃	〃
飾鉢	〃	宮坂隆生
ペーパーナイフ	岐阜県	県立加茂農林学校木彫部
カハセミ	〃	〃
菓子箸	〃	西川静
木ノ実細工(土人ダンス)	静岡県	白井覺
木ノ実細工(茶摘ム乙女)	〃	〃
木ノ実細工(弓引き)	〃	〃
抹茶碗(桐箱入)	〃	中村陶吉
珍菓オ茶ノ友	〃	増田正一
朱泥焼、銘々菓子器(箱入)	愛知県	濱野勝蔵
番茶急須	〃	〃
芸犬	三重県	坂本末重
木彫根付亀	〃	〃
牛	〃	坂井秀三
上戸型灰皿	滋賀県	加藤正一
ミノ虫座布団	〃	志那中処女会
小鳥ウヅラ	〃	西澤年男
鮎	〃	山田正春
藁	〃	〃
横猫	〃	上田勇造
立振猫	〃	〃

品名	住所	氏名(団体名)
舟型 水盤	〃	西尾辰次
ブツクエンド	〃	上田秀夫
菓子皿	京都府	田中唯夫
文福狸	〃	宇野田為吉
柱掛み、づく	岡山県	森末シゲノ
換栓	山口県	萩農美協会 福島悦心
黒猫	〃	山口農民美術組合
野面花タ、キ(硯)	〃	坪井美和
具足ト矢口	徳島県	岸上竹里
マット(小)	香川県	山下繁雄
四季の帯(七寸幅)	〃	宮崎フサ
農夫	愛媛県	中田恰
牛鬼(大)	〃	〃
珊瑚帯止	高知県	山本亀治
かふすぼたん	〃	〃
九重人形 総髪の大	〃	山本博章
〃 着付人形	〃	〃

以下次号

資料：『日本青年新聞』137号(1936年6月1日発行)をもとに作成

【主要記事資料】

凡例

- ・原文は縦書きであるが、横書きで表記した。
- ・旧漢字は原則、新字体にあらためた。
- ・句点や読点は適宜補った。
- ・振り仮名や圈点、囲み枠のほか、挿絵や写真は省略した。

① 1号 1930. 4. 15

「時代の要求に適した副業展と生活合理化展…盛会裡に幕を閉づ…」

三月二十一日から二十三日迄日本青年館で行はれた、第三回青年創作副業品展覧会と生活合理化展覧会を見る。

まづ、副業展の会場へ入ると富山県の出品物が一側を占領して堂々と副業陣を展開してゐる、続いて南は沖縄から北は樺太まで全国四十県からの出品物が千種類約六千点、所狭しと、各地各様の色を見せて、目白押をしてゐるのはなんといつても此処にのみ見る偉観だ。

個々の出品物に就いての紹介をしたいが余裕がないので他に割愛する、総体的に見て技術は進歩してゐた、然し之も三回を通じて比較的的平均されて来たといふ位で材料の生かし方なり、何を如何に製作すべきか、といふ様な決定的な点の研究に至るとまだまだ精進を望まなければならない。

機会と材料は何処にも公平に与へられてゐる。活殺の鍵を握るものは全国三百万の青年諸君だ。次回の展覧会を楽しみに待つ。

××

副業展を出ると合理化展の会場だ。《以下略》

《写真》副業展と生活合理化展 右上及中副業出品物・左上生活合理化展

② 15号 1931. 5. 1

「進歩の跡著しき青年創作副業展と一人一研究資料展覧会」

副業品展覧会も回を重ねること本年で既に四回である。年々着実な進歩を見せて来たが本年の出品物を見ると又一段の進歩の跡が見られるのは喜ばしいことの限りである。

三十六府県から集まつた三千五百点の出品物が所狭しとばかり夫々の郷土の特色を發揮して堂々の陣を敷いてゐる様は「これあるかな！」と言ひ度い位見事とも立派である。

×

展覧会に先立つて十三日から大日本連合青年団第七回大会が初まつて全国から参加した四百名の青年代表が会議に研究に精進してゐるので、この展覧会を是非参観して行つて貰ひ度いといふところから準備を急いで、十六日には全部の飾付を終つて大会参加者に見て貰つた。

十七日開会してからの参観者は随分多勢だつた。展覧会を目当てに来る人は勿論大講堂の郷土舞踊民謡大会の参観者は一人も洩れなく下へ降りて展覧会を見て驚き乍ら売約をして行く。都の塵に覆はれて暫く忘れてゐた魂の故郷があちらからもこちらからも呼びかけて呉れる喜びを、大きかれ、小さかれみんなが感じて呉れたことだらう。

開会間もなく一木宮内大臣と關屋次官が態々この展覧会の為に見えられ二時間余に亘つて熱心に御

覧頂いた。二日目には鈴木侍従長と河合皇宮太夫が御揃ひで御見えになつて「結構な催しす」と激励して下さつた。二三の御売約もあつた。其他知名の方の顔も大分見えて熱心に参観して行かれた。

×

各出品物に対する個々の批評は紙面の都合で省略する（之は追つて適當の方法を以て出品者の参考資料として提供する積りである一言申添へておく）が群馬県、岡山県、静岡県、兵庫県、高知県、青森県、沖縄県などの出品物は全体的に見て勝れてゐた。青年団の産業的な関心、努力の一年間の総合的な結果がこの展覧会を通じて何等かの形で表現されてゐる様にも考へられるし、又そうあつて欲しいと希ふものである。一寸見にはパツとしないが生活を延いては国家をさへ動かして行く、大きな眼に見えない根本的な力を吾々の企図する副業陣の中に期待して不思議はない。

×

一人一研究資料展覧会は又予想以上大きな収穫だつた。《中略》

=

入賞者

=

青年副業品展覧会の出品物は農林省の永松副業課長、見坊技師、内海技師、三村博士、山中囑託及家庭製作品奨励会の柴田竹子の諸氏審査の結果左の通り入賞した。《以下略、表2参照》

《写真》（写真は（1）右より展覧会来観の一木宮内大臣、後藤本団理事長、田澤同常任理事、（2）青森県出品数種、（3）岡山県出品の竹細工、（4）岩手県出品の雪靴）

③ 17号 1931.6.1

「大阪で盛況の副業展と一人一研究展 第二陣」

本団主催の副業品展覧会は従来は東京で三日間宛三回に亘り開催して来たのであるが、この展覧会の意義を一層徹底せしめる為、関西方面に於ても開き度いといふ希望をもつてゐた。然し種々の関係でこの希望の実現を見ずに経過したが、今年はいよいよ機熟して関西に於ける経済の中心都市大阪に於て開催することが出来たことを深く喜びとしたい。

会場は三越本館六階の催物場が充てられ、陳列点数約二千点それに共同主催である大阪府市男女青年団員の製作品約五千点と、一人一研究展は東京のを其儘陳列して堂々たる第二陣であつた。

五月八日を第一日として十二日迄五日間、場所柄参観者の数は頗る多く、熱心な団服の一団処女会のつましやかな一団、市内や市外から自分達の展覧会を一緒に観に来る諸君も可成賑つてそれだけでも開催の意義は充分であつた。

売約されて行く品物を通して東西両都市の一般的嗜好とか選択の傾向を比較して見るとそこに自ら差異のあることが明瞭に観取されることも面白い。大阪はどこまでも實際的であり、東京にはまだ鷹揚な物好きといつたところがある。日常生活に持込んで早速役に立つもの、地方色の濃厚なもの、外面的な粉飾こそなければどつかどつしりした重厚味のあるものなどは東西を問はず一様に歓迎せられる。

徒らに都会の需用者に阿ることは永遠の策ではない。模倣をことゝして創造性のないところに進歩はない。副業に対する態度を根本的に考へて、経済生活の安定と生産の拡充を企図することに青年団員諸君の奮闘を期待して止まない。

来年度の展覧会には更に創意を加へ、品質を改良しより實際的生産価値のあるものを製産して数に於ても質に於ても全日本の副業に対する努力の結晶が見られる様にしたいものである。

④ 19号 1931.7.1

「副業品も亦精製品たれ」

郷土工芸及芸術の好愛者たる私は先般の副業品展覧会を毎日見た。数種の品も買った。而し感じたまゝ、を忌憚なく云へば全体を通じて、非常に粗製だと云ふことは否まれない事実だ。これを副業品故粗雑は有勝ち、随つて値段も廉なりと云へばそれまでだが、副業品だからと云つて粗製品でいと云ふ理由はない。副業品なる故、荒削りの粗雑なものを、無批評に見て居れとは云へまい。イヤなら買うなどいふのか。併しこれは作品に売価を附して展覧したものである以上相当の製作品位を持さねばなるまい。又売価を附せずとするも、少なくとも展覧するからには、作者の誠意と品位が表現されてゐなければならぬ筈だ。私はこの点に於て、先般の展覧会を非常に思ふた。

「青年創作……」なる故に大人の展覧会よりも劣つてゐていと云うふ筈はない。否な少なくとも、その創作の熱意と作品の品位に於てはより優れてゐてこそ意義があるのだ。売価の廉不廉は問題外で、要は副業品にして有用なるべきことである、安からう悪からうの品は展覧会の期せぬ所であらう。

私は、この注文を、「青年創作副業品展覧会」なるが故に希望もし苦言も呈する。「粗製品廉売会」と云ふのならば、又何をか云はんやである。副業品の製作者、精作せよ之れ私の願ひである。
(東京 米山生)

青年春秋

寄稿は十四字詰四十行以内 青年諸君の若々しい気焔をドシドシ投書して下さい。

⑤ 20号 1931.7.15

「副業展覧会の真使命」

去る七月一日号の本欄に、東京米山生と云ふ方の過般のの副業品展覧会に対する忌憚なき意見を拝聴して、私も多少同じやうに感じた。而し米山氏の云はるゝように、全般を通じて、非常なる粗製品のみで、これならば粗製品廉売会など、銘うつた方がいいと云つてゐらるゝのにはいさゝか不満がある。私は勿論この展覧会の出品が、何れの展覧会の出品よりも優れてゐたと云ふのではない。然し最上級の工芸美術品をのみ観てゐる人には、それは粗製に見えたかも知れないけれども、その至らない作品の中に青年の創作の熱意が溢るゝ許り、出ていたことを私は、この上もなく嬉しく思つた一人である。たとへ、その結果はまづい。ある作品などに至つては噴飯を禁じ得ないやうな幼稚なものもあつた。

然し青年創作展は決して、一部工芸人や職業人のみの独占場ではないのだ。そこには青年団員の真個の生命があふれてゐる以上、たとへそれは出来上りはまづくとも、立派な展覧会品であり得るのだ。それが、世間の嘲笑をかつたとしても、それは甘んじてうくべき、青年団真個の価値であつて、我々は決して青年団自らの生命の価値をとらふ為に一部工芸人や職業人のみの展覧会場であらしめたくないのだ。

然しこれは一部工芸人を排撃する意味ではない。そこまでに至る段階としてこの展覧会の使命があり、意義があるのだ。「副業品の製作者精作せよ！」私もこの同じ言葉を斯様な見地から一般出品者の前にさゝげる。(すゞき生)

青年春秋

寄稿は十四字詰四十行以内 青年諸君の若々しい気焔をドシドシ投書して下さい。

⑥ 30号 1931.12.15

「逐年と反響増大の二つの展覧会 実施計画決定」

本団が青年創作副業展を開始してから四回青年の創作心の慫慂副業の振興に多大の貢献をなしたことは各府県でこの種の計画が盛になつたことに徴するも喜ぶべき傾向であるが更に本年四月学新に「一人一研究展」を開いて研究心を増長させたことは青年団が産業陣に大きな力を伸ばす原動力をなすものと各方面の期待は大きいがこの二つの計画が決定した。

第五回青年創作副業品展覧会

冬……副業の季節がやつて来ました。こんどの生年創作副業品展覧会は来春桜の東京で四月八日から十日迄三日間第一次と続いて、五月の中旬若葉京都で第二次を都合二度開催する。

青年諸君はさて、どんな品物を、どんな気持ちで作ればよいか、

我々の希望は……先づ、青年の創作的副業とはどんなものか従来、出品者は創作といふ事にかなり捉はれてゐるやうだ。

創作といつても、こゝでは何も新奇新案発明といつた、ことごとしいものを求めてゐるのではない、要は青年諸君の製作する品物に青年らしい清新な意気を表はしたい、その形が例へ昔ながらの副業品であつても亦外の誰もが作つてゐる品物であつてもちつともかまはぬ、そこに青年のものを創り出さうとする気持ちが溢れてさへゐれば……

出品された品物はみな展覧会場で都会の人々に売られます。

そこで品物には一つ一つ高からず安からず誰が見ても当前だといふ値段をつけて貰はねばなりません。

「都会人に売る」……こふいふ考へに捉はれて所謂浅はかな都会人向の品物を作ることは控へたいと思ひます。真面目な都会人士は田舎の、地方の堅実な姿を求めて居ります。

何よりも大事なことは……

これこそ、その地方々々の青年がまごころをこめて作つたのだ！ と肯かれるやうな手固い品物を出品することです。それが吾々の一番希望なのだ。要項左記の通り。

要項

一、展覧会の会場と期日

第一次展覧会

日本青年館（東京、四谷、霞ヶ丘）昭和七年四月八日より十日迄、三日間、

第二次展覧会

京都市（会場未定）

昭和七年五月上旬

第二次展覧会の期日と会場は決定次第本紙及雑誌「青年」誌上で発表します。

二、出品者の資格

男女青年団

男女青年団員

青年団関係者

なら誰でも出品することができます。

三、出品物

- 1、出品物は必ず売品に限る。
- 2、第一次並第二次展覧会への出品物は一纏めにして東京へ送ること。従て品物の数は例年よりも二三割乃四至（ママ）五割多く送つて下さい。

第二次会場へ直接輸送した方が、便利な場合は同会場宛送つて差支ありません。

四、出品の仕方

出品者は先づ昭和七年三月二十日迄に出品目録を送り、現品は必ず三月末日迄に届く様に送ること。宛先は

東京市四谷区明治神宮外苑霞ヶ丘口 大日本聯合青年団副展係

1、出品目録

用紙は半紙判罫紙

《図略》出品目録 住所 氏名 品名 単価 数量 製作の時期 従業人員 製産高

記入の注意

- 製作の時期……はその副業の行はれる時期を記します。
- 従業人員……はどんな人がどの位従事してゐるかを記します。
- 製産高……は一ヶ年間にどの位生産されるかその量と金額を記します。

2、出品票

出品物には一つ一つ左の様式で出品票を付けてくださいこれは定価札に代るものですから、体裁よく、丈夫につけて下さい。

大きさ 縦八分、横一寸位

(図略) 県名 氏名 定価 円 個数

記入上の注意

- 定価は品物一個の値段を記します。
- 個数は同じ定価の品物の数を記します。

五、出品物の販売

- 1、定価……は売品として、誰が見ても正しいと思はれる値段をつけること。特に展覧会の為に高くしたり安くしたり、する事はいけない。
- 2、送料……送料や荷造費は出品者が負担すること
- 3、売上金……売上金は諸雑費として総額の一割を差引き第二次展覧会終了後送金。

六、審査

主催者に於て委嘱したる左の審査員の審査の結果優秀なりと認められたるものには賞状を授与致します。

審査長 見坊兼光（農林省技師）

審査員 内海一雄（農林省技師）

同 三村鐘三郎（林学博士農林省嘱記）

同 菖蒲治太郎（農林省嘱記）

同 大山彦三（農林省技師）

同 山中省二（日本産業協会主事）

同 柴田竹子（家庭製作品奨励会）

⑦ 38号 1932. 4. 15

「青年の作品は光る 傑作二十八点の創作副業展」

本団及大日本連合女子青年団の共同主催にかゝる第五回青年創作副業品展覧会及第二回一人一研究資料展覧会の第一次は既報の如く去る八日から十日迄三日間日本青年館で開催された。本年は例年に比して出品点数は約三倍（別項参照）の九千点に達して会場も拡張したが所狭きまでに陳列された。今回の不出品の県は一同三府四十三県中僅かに七県を数へたに過ぎなかつた。

本年は都会も購買力が減少してゐるといふので、売上に係員一同憂慮してゐたが、八日の開場と同時に雨天であるに不拘初日に係員が目を廻す程の売行を示した。第二日、第三日も同様でこの三日間の総売上高は約五千点一千九百五十余円に達した。三日間の入場者も三万を超えた。

購買の経過を眺めると売行の一番は何といつても実用品であつた。例えば箒類、盆類、藁細工、竹細工（籠類、花立、笊類等）家庭用木工品等で第二が食料品で、柿、ワカメ、海苔類等は瞬く間に売りつくした。次は装飾品として壁掛、彫刻等であるが玩具も時局に因んだ竹製の機関銃とか、爆弾三勇士とかの人形が出たが、竹の機関銃は瞬く間に売り払つた。

人形はこれは今後大に考慮すべきで、女学生等には買はれたが一家を持つた人には余り振り向かれなかつた。これは市内にも既に沢山出てゐる関係からも知れぬ。

全体を通じて、値の安いものかどうしても一番に売れるのは不景気で、東京の各デパートが廉売攻めにしてゐるので、都会人の共通の購買心理であらう。

出品物の入賞者決定については本年は真に価値あるものに止むるといふ厳選主義に基いて審査員が厳正に選択せられた結果僅か二十八点しか入賞しなかつたが、入賞したものは真に粒選りの傑作である。左に入賞者を紹介しよう。

《以下略、表3参照》

⑧ 40号 1932. 5. 15

「若葉の京都に 盛大をきはめた第二次創作副業展」

わが大日本連合青年団主催の青年創作副業品展覧会は既報の通り四月上旬東京に於ける第一次展を終えてその第二次展を、去る四月二十九日より、五月三日までの五日間京都市商工会議所に於て開催した。

□茲では京都府男女連合青年団主催の第一回青年工夫創作産業展覧会と同時開催され、それに府下中学校二十五校の男女生徒の工夫創作にかゝる参考品も多数出品されて、非常なる盛会であつた。

□殊に京都に於ては斯る全国的副業品の展覧会は最初の試みのことゝて、五日間を通じて、參觀者一万数千に達し、一般青年団員は勿論のこと、都下中等学校生徒、その他一般市民に与へたる刺激は相当大なるものがあるた。

□本団の出品物は東京第一次展と大差なく、これに愛媛県の竹籠類が多数追加出品されて、それ等が殆ど売り尽されてしまつたこと等は、本展覧会の出品物が、その質に於てたしかにすぐれたものであることを裏書きするもので、本展覧会の使命のため大いに意気を強ふした次第であつた。

□その他長野県の木工品を始めとして岡山の竹細工等、その売上総点数は一千点に達したことも大きい収穫であつた。

□京都府連合青年団の出品物は男子の三百二十八展、女子の五百七十九点で合計九百七点あり、何

れも、真摯な青年の工夫創作の熱意が一つ一つの出品物に横溢してをり、将来の同展の発達を暗示するものがあつた。入賞は男子二十七点、女子八十六点で、何れも優秀なものゝみであつたが、この数字でも見るやうに、男子の出品が、女子の出品に比して劣つてをり、その出品物も、女子の手芸品が主であつたこと等が、多少遺憾に感ぜられた。

⑨ 55号 1933.1.1

「副展と一人一研究展 第六回青年創作副業品展覧会」

恒例の青年創作副業品展覧会も、この春で愈々その第六回を迎え、第一次展を来る四月中旬東京で第二次展を五月初旬神戸で都合二度開催することになりました。

昨年は東京の第一次展だけでも、その出品点数一万を超ゆるといふ盛況で、これは団員諸君が益々副業の価値を認識しその途に精進されてゐることを物語るものとして、関係者一同喜びに堪へないところであります、今年は昨年にも増してより優れた作品が、より多く出品されるやう切望して止みません。

そこで、今年はどうな品物をどんな気もちでつくればよいかを簡明に注文して置ませう。

□先づ、創作といふ字に余り囚はれないことです。これは前にも屢々申し上げましたが、創作といつても、何も新奇な発明といつた、ことごとしいものを求めてゐるのではありません。要は青年諸君の製作する品物に、模倣でない、青年自らのものを創り出さうとする清新な気持ちを表はしてもらへばいいのです。

□それから、都会人に売る……といふ考に囚はれて、所謂都会人にこびた品物を作ることは差控へたいと思ひます。飽くまでも、地方地方の堅実な手堅い品物を出品して下さい。

□それから出品物は鑑賞用としてよりも実用品として直接われわれの日常生活に役立つものが歓迎されます。勿論鑑賞用と雖も全然排斥するものではありませんが、それに少しでも研究工夫を凝らして実用品として役立つことが出来れば一層望ましいことです。

□それから、従来の副業品は主として国内の消費を目的としてをりましたが、これから広く海外にも市場を求めて、大いに副業日本の躍進を計り度いと思ひます。今回第二次展を神戸に選んだのも、外人の沢山集つてゐる同市で、本展覧会を通じて、その品物を海外に紹介し、同時に販路の拡張をも計り度い趣旨からであります。従つて、これなら海外に向くだらうと思ふものは、どしどし出品して下さい。が、輸出向だからといつて、何も特別に変つたものを要求するものではありません。従来諸君等が製作してゐる品物に更に研究と工夫を凝らした、堅実なものを送つて貰へばいいのです。この場合特に注意して欲しいことは、あくまでも実用品であつて欲しいことです。今度の展覧会は斯うした副業農村の海外進出の意図を多分に含んでゐます。さういふ意味からでも、青年諸君の一層の精進を望んで止みません。

⑩ 61号 1933.4.1

「愈々近づいた郷土週間 非常時局を反映した大会議題と出品点数二万点突破の副業展の盛況」

郷土週間もいよいよ十日後に迫つた。大会の議題は全部出揃つてもう印刷に附して各加盟団に送られた。副業展覧会や一人一研究資料展覧会の方は我々の予想を遙か超過して、去る二十日現在までの出品申込点数は既に一万六千を超へ、未整理中の新申込を含むと、優に二万に垂んとしてある。而も、群馬、愛知、神奈川等々の各府県の展覧会を経て、県で一まとめにして送つて寄越す大口の出品申込がまだ到着してゐないといふ有様だから、それがつくつと、最少限度に見積つても、二万数点の多数に上ることはうけ合うひである。

昨年は、その前年の出品点数の五千に対して、一万といふ激増ぶり、そして又今年はその二倍以上の二万幾千点……この幾何級数的増加は抑々何を物語るものであらう。各地に於ける各種の展覧会が漸次凋落の傾向にあるとき、ひとり青年団のこの展覧会のみがすばらしい発展を来しつゝあるといふことは、青年団員諸君の産業生活が如何に潑刺として進展向上厚生しつゝあるかを物語る証左である。と同時に、社会一般の本展覧会に対する信頼と期待が益々大になりつゝあることを物語るものであると信ずる。

一人一研究展も昨年の倍増の申込み。之を助成金の交付者並団賞の受賞者と共に展覧すると百名余りになる。之等の輝やかな研究の実績で室内が眩ゆいばかりに青年の純情と研究と努力とに光り輝くであらう。

郷土舞踊の出演者は、十二日東京着直ちに練習にとりかゝるが、既に地方地方に於て猛練習をくり返してゐる由。これも例年の通りラヂオで全国に放送される筈。

大会の議題も別項の通り、時局を反映した文部省の諮問案を始め、本団提出の二つの議題にも、今年青年団の歩みを方向づける幾多の名論、決議がなされることであらう。

兎に角、開期は迫つた。

来る十日の大会前日を始めとして、十二日からは展覧会、十四日からは郷土舞踊……と、十六日までの一週間は、文字通りの郷土週間として、各々郷土の名誉と伝統と抱負との仲に、日本青年館それ自体が、完全に溶け入つて行くであらう。

外苑の春は日本青年館から…

外苑の賑はしさが想ひやられる。

⑪ 63号 1933.5.1

「郷土色豊けき青年の創作副業展覧会 大官名士の来観相繼ぐ」

本団及大日本連合女子青年団の共同主催である青年創作副業品展覧会及一人一研究資料展覧会は既報の如く去る四月十二日から十六日迄本年度郷土週刊の第二陣を承つて開催された。

今年は又出品点数が非常に増加して一万を突破すること六千、従つて会場も拵げられるだけ拵げたが、それでも狭隘の嘆を洩す程であつた。

第九回大会の開会式が挙行され、日に夜をついで陳列を了し翌十一日公開に先立つて審査が行はれ、(審査員の感想は別項に掲載) 四十七点の優秀作品が入賞の榮を担つた。

×××

公開第一日は平日であつたに係らず、予想外の參觀者がひきもきらない。ファンと言ふ言葉は当らないが、毎年の顔馴染みである熱心な人達が大分見える。目ぼしい物がどんどん売約されて行く。

売約の筆頭は何と言つても実用的なものが多い。子供のものとも、大人のものともつなかい人形や玩具は、もう単なる珍しさに慣れて注意を惹かない様である。

×××

此日非公式ではあるが、宮中から皇后宮職の方々が来場せられて会場の隅から隅まで熱心に御覧なされ、七十有余点の御買上を賜はつた。出品者各位と共に大いに光榮とすとの（ママ）ころである。湯浅宮相、荒木陸相、床次前大臣其他知名の方々も多数御来場になつて、係員も恐縮する程熱心に御覧頂いた。素材そのものにはさ程の値打ちのないものが、色々に工夫されて、なんとか之を生かして行かうとする青年の苦心を見られて、ウナヅイて居られた。

×××

今年の展覧会で殊に意を強くしたのは、いつもに較べて地方の出品者が大分参観に来て、吾々係員とも意見の交換をしていつて呉れたことである。井の中の蛙で一人よがりの製作者、意識的に無意識的に模倣追随、何等の独創性も熱意もないかの如く見へる数多くの製作者が、残念乍ら大分ある様である。かうして全国的に陳べ、発達の経路を併せ考へた場合に、それは一つ一つ指摘出来るものである。

×××

真面目な出品者が、犠牲を払つて参観に来て呉れたことは何としても嬉しい。我々は其人達の間から、又新しい、力をもつた副業品が生まれて来るであらうことを信じる。研究を願つて止むまない。

×××

尚今年の府県別出品点数、入賞品は別項の通りである。

榮ある入賞者《以下略、表4参照》

==

副業展グラフ

《写真》①展覧会参観の荒木陸相、②入賞品に見入る湯浅宮相、③展覧会場の一部と入賞品の数々

==

第二次展予告

第六回青年創作副業品展覧会

◇期間 五月二日——五月七日

◇会場 神戸市栄町町大丸呉服店

第三回 一人一研究資料展覧会

⑫ 63号 1933.5.1

「創作副業展大観（一） 内海一雄」

今年の青年創作副業品展覧会は出品数二万に近く、其の種類も数千種に達して、年々盛大に赴いて居るのは大変結構なことである。

今年の出品物に就いて概況的に感想を申上げると製品が大体に於て非常に整つて来て其の工作と云ひ、或は彩色意匠といひ、一般的に其の技術が向上して、甚だしい見劣りのするもの、少なくなつたことは大いなる進歩と謂はねばならぬと思ふ。殊に従来の出品が例へば人形にしても唯単なるおもちゃに過ぎなかつたものが今年の出品傾向から見ると人形にしても或は木工にしても之を実用化

せんとする傾向の窺はれるのは大変結構なことである。併しながら少々遺憾に思はれる点は、其の出品の大多数が前回出品の物に類似して居つて、よし部分的には新しい考案なり研究なりがあるにしても大体に於て、この展覧会の最も大きな目的として居る所の創作の点に於て今まで曾て見なかつたと云ふ新考案の製品が一般的に少なかつたことである。殊に出品の大部分を占めて居る所の人形であるとか又は小さい竹細工製品——さう云つた賞玩物は変化に乏しいと、嫌はれてしまふ恐れがあるから、特に新考案の研究に努力せられんことを切に希望してやまない次第である。

北海道

熊彫は八雲農民美術研究所を中心として非常に精巧なものを製造されて従来から評判となつて居つたが、今年も益々其の技術が磨かれ熟達せられた結果、頗る優秀な物が多数出品された事は大変よい。殊に喜ぶべきは熊が単に一つの置物としてではなく其の熊彫を例へば置時計の傍にひつつけたり、或は煙草の灰皿に作つたり、又或は吸取紙の摺みとか、さう云つたやうな実用品に応用をせられて居つたのは頗る結構なことである。殊に其の時計の台の如きは頗る良く出来て居つた。併し例へば灰皿であるとか吸取紙の摺みの如きは、未だ熊其の物は良く出来て居つても、全体として少々調和の取れぬと言つたやうな憾みのあるものもあつたやうである。是は大いに其の点を改善せられて、益々装飾と実用とを兼備へた方面に研究の眼を注がれんことを切望する。

山形県

山形県から相当に胡桃製品が出品されて居つたが、是は従来なかつた製品で新考案として大変面白く感ぜられた。殊に胡桃製のカード立は其の鳥の嘴の部分が非常に面白く出来て居つた。是は輸出品としても相当有望なやうに思ふ。唯々其の工作に於て胡桃の殻のゴミを掃除しないものがあつたり、カード立である拘らずカードの十分挟まらないものも二、三見受けられたし、堅牢性に於て未だ充分でない憾みがあつた。

茨城県

茨城県から出品されて居た新治人形は二、三年前までは非常に賞賛を博したものである。本年も大分沢山出品されて居つたが、最近其の製作者の増加と共に少々粗製に流れ新治人形の特徴を失つたかの感がある。今回の出品に就いて見ても其の感が深かつた。地方の製作品が一般に少々評判が出ると、皆んなが粗製品を拵へ全体の声価を失墜するに至るから、是は十分に注意せられなければならぬ。

尚是は新考案品としてではないが、数百本の座敷箒が出品されて居つたが、相当技術に於ても立派な物があつた。座敷箒は農家の副業として相当有望なものであるから粗製乱造に流れにやうにお互いに戒め合つて製作されたならば、是は地方農村青年の副業としても有望な仕事のやうに思はれる。唯遺憾に思つた事は出品物の多くに黴が発生して居つたことである。是は製作後の乾燥が不十分であり、又貯蔵法の宜しきを得なかつたが為であらう。此の点は少くも今後十分注意して、他へ商品として搬出する折には黴を十分取除いて出すやうにされたい、殊に展覧会等に出品の際に斯る物を出されるとは不注意千万である

其点今後十分に注意せられたい。

群馬県

出品中竹籠の如きは最近相当技術が進歩した跡が認められるが、併し木製の人形であるとか、竹製の玩具の如きは少々未だ技術に熟練を要すると思はれる点があつた。殊に最も注意を促さなければならぬ点は人形の顔料（染料）に不良な物を使用した物が見受けられたことである。斯う云ふ人形の如きは赤ん坊の口にはいるといふやうな恐れもあるから、有毒性の顔料は絶対に使用せぬ様呉ゝも注意して貰ひたい。

東京府

東京からは多数の竹製の人形類や小函類が出品されて居つが、此等は概ね技術優秀で他の追隨を許さず断然一頭地を抜いて居るやうな物が多かつた。殊に竹製の人形の台を楊枝入れに利用して居るのがあつたが、是は非常に面白く感じた。竹製の人形は輸出品としてもある程度可成の見込のあるもので、外人は一般が唯単に人形である許りではなくして、それを日用品に応用されたものを喜ぶ傾向があるからして、大いに斯ういふ物は歓迎されることゝ思ふ。

新潟県

多数の竹籠が出品されてゐた。これは木の根を適当に配して面白い且雅味に富んだ物であるが、是は本県の特産であり、又特徴のある品である。製作上注意を促さなければならぬ点は大体に於て大変良く出来て居つても、僅かの仕上げんの部分に手が抜いてあつて全体をぶツ毀して居るといふような籠があつた。例へば籠のふちであるとか、手だとか云つたやうな部分の製作上の注意が欠けて居つたが為、僅かの事で籠全体をぶツ毀すと云ふやうなものがあつた。

福井県

多数の竹製の人形が出て居つたが、本県としては新しい近頃の製作に成るもので多くを望むことは無理かも知れぬが、他府県の物に比して稍々遜色があつて物足りなく感ぜられた。今後製作者は一層技術の向上に精進される必要があると思ふ。

それから山独活の粕漬が出品されて居つた。是は面白い思ひ着きで結構であるけれども、其の製作技術が未熟で全で繊維許りの物が大部分であつた。是は今少しく研究される必要があると思ふ。

長野県

農民美術の本場だけあつて其の種類も多く其の品質に於ても他府県の追隨を許さぬ優秀な物が多数見受けられた。特に今年 of 出品中には新考案としては白樺の皮やコケ類をテープ細工風に絵画化した、白樺の額——是は従来見られなかつた製品で、其の製作も精巧で頗る優秀、一見甚だ粗野の如くで然も調和もよく取れて居り、雅味があつて非常に面白い製作品であつた。

それから焼杉の細工——是も従来見られなかつた製作品で、盆、煙草盆、花立などが面白かつた。新製品としては松の皮付材の細工、花立、置物と云つた物は、都会人の従来 of 型にはまつた製作品に慣れて居る者の眼には、非常に物珍らしく好評であつた。

唯遺憾に思はれた点を強ひて批評をすればそれ以外の他の農民美術的製作品には稍々型にはまつた感があつたことである。例へば遠近応用の額の如きにしても製作が熟練するに随つて却て趣味を減じたと云ふやうな感があり、所謂手工品の面白味がなくなつて型にはまつた機械製作品に段々近付いて来るやうな傾向が窺はれる。勿論農民芸術の製作品は産業として売るといふことも考へなければならぬけれども、然し売ることを主にして価格を安くすると云ふことのみで走つて、農民芸術其の物の本来の性質を失ふに到ると云ふことは、所謂角を矯めて牛を殺すと云ふことにもなるから其の点十分注意されることが肝要である。次に小箱類の如きものが出品されて大変結構である。併し彫刻其のものは大変立派にはなつて居るけれども箱全体として見る時は如何かと思はれる物が多かつた。箱の表面の彫物を見れば大変立派なものであるが、箱の蓋を取つて見れば案外粗末な物であつた。これは彫刻だけに重きを置いて、箱全体の調和とか、実用性をおろそかにした傾向が見られた。此の点は殊に注意されて欲しい。(つゞく)

⑬ 64号 1933. 5. 15

「神戸市に開かれた副展第二次展の盛況」

本団主催の第六回青年創作副業品展覧会と、第三回一人一研究資料展覧会の第二次展は、兵庫県聯合青年団主催の副業品展覧会と日を同じうして、去る五月二日から七日迄神戸市栄町の大丸呉服店に於いて、賑々しく開会された。

神戸に於いて副展を開いたのは、今回が初めてであるのと、会場が、デパートメント・ストアであったために、来観者は日日数万人に及んだ。

又、神戸といふ場所が場所だけに、外国人の来観が非常に多く、何れも日本の農村青年の作品に驚異の眼を見張つてゐた。

売行は非常によく、出品物の過半数が売れたが人形其の他の玩具は実用品に較べると余り歓迎されないやうであつた。

この事實は、全国的、千変一律となつた人形類に対する一般人の欲望が減少したことを示すものであると同時に、世間の人々が、堅実な実用品を欲してゐることを物語つてゐるものであると思はれる。副業品を創作する人々は、今後一層その辺のことを考へる必要があらうかと思ふ。

⑭ 64号 1933. 5. 15

「創作副業展大観（二） 内海一雄」

岐阜県

本県では番傘であるとか、蛇の目傘等別に新考案とは認められないやうな物も少なくはなかつたが、出品点数は多数あつた。本県では曾つて長良川の鵜飼のお土産として農民美術の講習が行はれたことがあるので、今回も是等に件うたやうな製作品が多数出て居うた。技術も上達して鵜の木彫の如きは、純然たる美術家の、一流の製作品にも劣らぬ程の立派な作品である。斯う云ふ立派な物を一般農村で作ることは難しいかも知れないが、農民美術と云へば一般にはたゞ百姓臭く素朴であれば宜いやうび思ふことは、大いに間違ひで相当技術的に見て立派な物を作るやうに務めれば、農民美術としても永久性がある。北海道の八雲では熊を専門にして居る為に他地方の追従を絶対に許さぬ立派な物を作つて居るが、それと同じやうに岐阜に於ても鵜を中心として、各種の製作品を工夫されて立派なものを作ると云ふことは、産業的に見ても大変必要なことである。

殊に岐阜県の出品に就いて愉快に思つたのは製作品其の物は著しく優秀な物とは言へぬけれども、加茂郡吉井町の加茂農林学校から多数の製作品の出で居ると云ふことである。最近中等学校に於て産業教育が非常に旺んに叫ばれて居る時代に、農学校が斯う云ふ農民製作品を生徒に課して趣味と実用を兼ねた仕事の基礎を作ることに努められてゐることは、非常に愉快に感じた。

今一つ桐の廢材の利用と云ふことは各地で研究をされて居るが、大して見るべき物がなかつた。所が今回岐阜から出品されて居つたものでこれに胡桃の実を配して模様化し、煙草入を作つてゐたが一つの思付として、此上の研究を希望する。

愛知県

愛知県からは竹製の人形だとか菓子鉢だとか茶器だとか云ふやうな物が沢山出て居つて技術が精巧でなかなか立派な物があつたが、特に新考案と云ふ点は認められなかつた。たゞ焼物では火鉢に漆を掛けたのが、大変雅味もあり面白い物であつた。

それから藺草で拵へた荷造り用の細繩は新考案ではなかつたが非常に技術が優秀で力も強く立派

な物であつた。果物だとかさう云うたものを縛るに使ふ繩は、現在相当に需用が多いに拘らず従来余り生産されて居なかつた。所が今回出品になつて居うた葦繩の如きは麻繩代用の物として非常に需用が広く且つ有望なものであるやうに思はれる。

三重県

三重県よりは神木細工が相当に出品されてゐた。御神燈や翁（人形）、小槌のやうに神木を利用することの出来るのは三重県の独占事業であるから今後益々農村の仕事として発達させたい。それだけに他府県で製作して居るやうな物は真似をしたくないと思ふ。今回出品された翁人形の如きは奈良の翁人形を模倣した物に過ぎない。苟も伊勢の神木を利用するのであるから伊勢独特の物を作るやうに注意されたい。

滋賀県

此の県から出品された桜人形——是は新考案でもあり又大変面白いものであつた。

尚トマトのジャムが、出品されて居たが、是は処女会の出品であつて、処女会あたりがかく食料品の加工貯蔵と云ふ方面に進出することは大変必要なことであると感じた。トマトの如きは蔬菜中最も栄養価に富んだ物であるから其の栽培を一層旺にし、斯う云ふ加工品を作つて貯蔵し施行用に供する外更に進んでは販売用にもすると云ふことになれば将来有望である。

島根県

此の県からは松皮細工の優秀な物が出て居つたやうに見受ける。松皮細工は本県が元来本場であるが、近時各地に其の製作が旺になつて寧ろ圧倒され勝な観があつたが、今回の出品中、殊に松皮製の庚申猿は頗る優秀な物で本場品たる貫禄を示してゐた。

岡山県

本県は竹製玩具の発祥地だけあつて、其の出品の大部分が殆ど竹製の玩具であつた。固より技術は頗る優秀で、又新しい製品も多い。殊に今回出て居うた大型の蝦の如きは、竹の節を蝦の節に作つて自由に屈伸が出来るやうになつて居る実に優秀な物であつた。たゞ最近生産が各地に起つて相競ふの結果、多少粗製乱造の傾向が窺はれる事は今後特に注意する必要があると思ふ。

香川県

本県からは最近金毘羅土産或は屋島土産を目的の農民美術が奨励され、色々面白い物が出来て来た。今回の出品では松皮で拵へたダルマが技巧優秀であつたが、香川県の如き数万の観客の殺到する県に於ては、今後益々土産物としての製産が進出する余地が多分にあること、思ふ。それにしては現在の状態では製品の種類、数量に於て遺憾があると思ふ。又婦人の製作品としてボロの裂織製の帯が出て居つたが、これは従来東北地方で作られ木綿裂を以てしてゐた関係上稍趣きの足らぬ感があつたが、今回は絹のボロを用ひたもので洪い又何処か上品な面白味がある。是は何本も同じ物を拵へることは困難であるが、一本々々それぞれ変つた趣きが出るから地方の趣向用としても面白いし、又販売用としても将来相当販売価値のあるものと思はれる。

埼玉県

本県の松山町から菱の実で拵へた各種の風俗人形が出品されて居つた。菱の実の三角の形を非常に巧く採入れてコジンマリとした大変面白い人形だつた。是は新考案で菱の実の利用としては非常に巧くやつて居る。唯惜しむらくは菱の実だと云ふことが判然しない傾きがある。察するに菱の実に対して添加物の方が勝つて、菱の実が負けてゐるのではなかつたらうか？ 此の頃の都会の人形の嗜好は寧ろ小さいもの小さいものと云ふ方に赴いて行く傾向があるから、もう一息の工夫を望んで止まない。

京都府

最近農民美術の製作が大いに奨励されて居り、今回も多数の出品竹玩具人形或は布帛品等相当見るべきものが多かつたが、美術の都を持つ京都府下としては、甚だ物足りなかつた。

兵庫県

京都府の不振に引換へて、兵庫県の出品は主として神戸市の出品で、布帛品レース類或は刺繍品等各種の製品に立派なる物が多かつた。断然一頭地を抜いて居つた。携帯用算盤手帳と云ふものがあつた。是は従来なかつた製品で帳面と算盤と一緒になつたものである。外見は帳面だが、開くと算盤と帳面と一緒になつてゐる。携帯用に非常に便利で立ちながら計算して書込めると云つた商人向きのものである。

山口県

本県の大内人形は例年の如く製作が優秀で本年は面白い物が多く殊に角形のものゝは推賞すべきであつた。

高知県

本県からはズゞ玉の種々な細工品が出て居つた。是は昔からあるものであるにも拘らず、今回の出品の如きも直ちに多数が売れてしまつた。是等は土産物としてある程度まで産業的にも価値のあるものではなからうか。

其の外に各種のステツキが沢山出て居つた。殊に自然木の風雅なステツキが種々あつたが、これは都会でも需要が多く有望な物と思はれる。但しもう少し入念に仕上げをする必要がある。

愛媛県

本県からは竹籠類が沢山出品せられたが新し味に乏しい。是は唯単に愛媛県だけの問題ではないが、花籠にした所で染色の変つた物或はもう少し他の日用品を考案することは出来ないものだらうか、其の辺の研究が今一層必要であると思ふ。

鹿児島県

本県からも多数の籠が出てゐた。元来本県の竹細工品は比較的製作の歴史が新らしいに拘らず優秀な物が多かつたことは慶賀すべきであるが新考案と認める物がなかつた。

朝鮮

小型の泥製の人形が相当出て居つたが、是は気分を十分に發揮した面白いものであつた。中に二、三内地製品を模したやうなものもあつたが、それよりは朝鮮独特の風俗なり気分なりを現はした方が宜からうと思ふ。(完)

⑮ 79号 1934.1.1

「副業展と一研究展 来る四月と五月 東京都名古屋に華々しく開催 団員諸君の盛なる出品を望む」

第七回青年創作副業品展覧会

いよいよ副業の季節が近づいて来ました。

団員諸君はこの長い副業季節を、どう利用されやうとしてゐますか。

×

今年の展覧会は、東京の第一次展を、来る四月の十二日から十六日まで五日間日本青年館で、第二次展を四月下旬から五月上旬にかけて名古屋市に於て同じく五日間都合二回開催することになりま

した。

×

本展覧会が年を重ねる毎に異常なる発展をとげ昨年の如きは、東京の第一次展だけでも一万七千点といふ出品点数を数へ、現在では、日本全国に亘つて、この方面の展覧会に於ては最も大なるもの一つとして、副業日本の進展に貢献してゐることは、自他共に異論のないところであります。

今年は更に、数に於ても質に於ても、「日本一」の誇を持ち得る様な優秀なものに築き上げて、真に名実共に、副業日本の最高峰たらしめたいと思ひます。団員諸君の一段の援助を願ふ次第です。

×

それで、今年は、どんなところに最も力を入れていたゞき度いかを左に簡単に記して見ませう。

×

まづ第一条件は、何といても実用品であつて欲しいことです、たゞ飾つて喜ぶ……といふこと文けでなく、直接我々の生活に役立つ極く卑近な品物を送つて下さい。われわれの家庭で、玄関や、座敷や、風呂場や、台所等の品物一つにも一寸工夫をこらした丈けで、以前よりも、もつと手固いもつと便利な品物が生れて来ると思ひます。

さうした品物をどんどん送つて下さい。

鑑賞用といつても勿論排けきするものではありません。たゞ、これに、少しでも研究工夫を凝らして実用品として役立つことが出来れば一層望ましいことです。

×

それから特に今年力をいれていたゞき度いことは、各地の土産品が、九州から来るのも、中国から来るものも、東北から来るものも、殆ど同じ型、同じ色彩で、その間何等の郷土カラーといふものを見出しえないことです。これでは、郷土の土産品として余り喜ばれません。今年は、この点に特に研究工夫を凝らして、真に郷土色の豊醇に現はれた品物を出品して下さいませう御願ひします。

×

それから今年は海外輸出向の出品に一団の力を入れて欲しいと思ひます。昨年の第一回のこの試みは、場所が神戸市である丈け、非常なる成功でした。我々は折角芽を出しかけて来たこの種の出品を、ますますもり立てゝ、広く海外に市場を求め、文字通り日本の海外進出を計り度いと思ひます。

何が海外に向くかといふことはむづかしい問題です。しかし輸出向だから……といつて何も特別に変つた新奇なものを要求するものではありません。従来諸君等が製作つてゐる品物に更に研究と工夫とを凝らした堅実な実用品であればいいのです。

×

いつものことですが、創作いふ字に余りとらはれたり、都会人に売るのが……といふ気持ちで、參觀者にこびた品物などは、断然排けきします。あくまでもあくまでも青年自らのものを創り出さうとする清新な気持ちを現して下さい。この精神こそ展覧会の生命ですから。

要項

一、展覧会の会場と期日

第一次展覧会

日本青年館（東京市四谷区明治神宮外苑霞ヶ丘口）

昭和九年四月十二日——十六日

第二次展覧会

名古屋市（会場未定）

昭和九年五月初旬

第二次展覧会の期日と会場は決定次第本紙及雑誌「青年」誌上で発表します。

二、出品者の資格

男女青年団

男女青年団員

青年団関係者

なら誰でも出品することができます。

三、出品物

1、出品物は売品に限る。

2、第一次並第二次展覧会への出品物は一纏めにして東京へ送つて下さい。従て品物の数は例年よりも二三割乃至四五割方多く送つて下さい。

四、出品の仕方

出品者は先づ昭和九年三月二十日迄に出品目録を送り、現品は必ず三月末日迄に届く様に送ること。宛先は

東京市四谷区明治神宮外苑

大日本聯合青年団副展係……とすること

五、出品物の販売

1、定価…は売品として誰が見ても正しいと思はれる値段をつけること。特に展覧会の為に高くしたり安くしたりすることはいけません

2、送料…送料や荷造費は出品者の負担です。

3、売上金…売上金は諸雑費として総額の一割を差引き第二次展覧会終了後送金します。

⑩ 87号 1934.5.1

「空前の大盛況 愈々面目躍如たる創作副業品展覧会」

去る四月十二日より開催された第七回青年創作副業品展覧会は、今年も非常なる反響を与へつゝ、十六日終幕し、左の人々が入賞した。本年はその出品者が六百二十五名の多きに及び、これを出品種別にすると二千六百余种、その点数二万四百五十八点といふすばらしい数字を示して、副業日本の進展の為に、万丈の気を吐いた。殊に今年度の展覧会に於て我々関係者が最も喜びを感じたことは、出品物の一つ一つに、従来に比し非常な堅実味が現れてゐたことで、出品の種類からいつても、玩具や鑑賞品が減つて、実用品が著しく増加し、而もその中に、青年諸君の若々しい創意と素朴さがよく現れてゐたことであつた。

勿論、出品物の一つ一つについては、技術的に見て未だ未だ研究をすべき点が多い。これは青年諸君の努力に待つより外はない、諸君の一層の努力を願つて止まない。

入賞出品者並氏名《以下略、表5参照》

《写真》（上）副展会場、（下）研究展室、副展会場に於ける湯浅宮相、入選した長野のペーパーナイフと山形の福だるま、研究展室に於ける理事長と副理事長

青年創作副業展出品物批判座談会 去る十六日日本青年館に開催

去る十二日より十六日まで開催された第七回青年創作副業品展覧会は別項記載の如く非常なる盛況裡に幕を閉じたが、大日本聯合青年団に於ては、更にこの展覧会に出品せられたるものについて、今後の指導と、販路の発見並に拡張に資しやうとの見地から、斯界の權威者を招き、十六日午後六時から標記の如き座談会を開催し、種々懇談するところがあつたが、各方面から忌憚のない意見の発表等があつて、本展覧会の指導上誠に有意義であつた。

因に本座談会に出席された方は左の諸氏である。

内海一雄氏（農林省）、三村鐘三郎氏（審査員）、柴田竹子氏（審査員）、金子角太郎氏（松屋）、織田信大氏（白木屋）、海沼健治氏（高島屋）、齋藤晴雄氏（松坂屋）、豊泉益三氏（三越）、横山枉太郎氏（横浜商工会議所）、田中章一氏（日本工人倶楽部）、小野俊一氏（発明実施研究所）、田邊孝次氏（東京美術学校）、木檜恕一氏（東京高等工芸学校）、森口多里氏（早大講師）、外本団職員八名

⑰ 89号 1934. 6. 1

「この光栄！ 宮内省の御買上に輝く本団副展出品の数々」

わが大日本聯合青年団が、本団の成立当初よりたえず重なる皇室の御恩寵を忝なふしてゐることは、われわれ団員の等しく恐懼感激措く能はざるところであるが、更に去る四月日本青年館に於て開催されたる第七回青年創作副業品展覧会に際しては、わざわざ皇宮職をさしつかはされ、斯道御奨励の有難き思召から多数の品々を御買上げ遊ばされた。われわれはこの光栄を排し、誠に感激に堪へないものである。右御買上の光栄に浴した団員諸君も、今後益々精進して、御恩寵の万一にも酬ひ奉らんことを期すべきである。

右御買上の光栄に浴した人々、並に品目は左の如し。《以下略、表8参照》

⑱ 102号 1934. 12. 15

「二つの展覧会と郷土舞踊 実施大綱決定」

本団が青年創作副業展を開始してから七回、一人一研究展を開いて自主創造の美を歌つてより四回、全国青年の創作心の助長向上、副業の振興に多大の貢献をなし来つたこと今更論を俟たない。更に来春四月、第八回青年創作副業品展覧会第五回一人一研究資料展覧会を開いて、青年団の持つ産業的役割の華々しい実績と躍進を期することになつた。尚これ等と時を同じうして第九回郷土舞踊大会が日本青年館で実施せらるゝことになつた。来年日本青年館成立十周年記念に相当して例年に増して盛大を極むるものと察せらるゝが、いまその上演種目について各府県連合青年団宛照会中であるが、各青年団に於ても自らの郷土が誇る郷土美を本団宛一報してはまだ知らざる郷土の姿の紹介に努力しつゝ、あるこの試みに支援して頂きたい。

第八回青年創作副業品展覧会

我々の試みつゝある副業奨励この催、青年団の産業世界を占むる役割。その正しい遂行を果しつゝあるこの試み。今こゝに我々は大きな誇りを以て、来る四月開かるゝ第八回青年創作副業品展覧会

の開催を宣言することが出来る。

来春の展覧会は四月三日より五日間日本青年館で開かる。来春は東京の第一次展だけで従来開かれた第二次展は開催せられないことゝなつた。

本展覧会は、年を重ねる毎に異常なそして驚異的な発展を遂げた。昭和九年に開かれた第七回青年創作副業展は出品種別二千六百余。出品点総数は二万四百五十八点といふすばらしい数字を示し、その出品物の質に於ても副業日本のために万丈の気を吐くにたるものであつた。その傾向は堅実味、郷土色にあらはるゝよき産業人としての心構。玩具や鑑賞は勿論、実用品にもみらるゝ青年の創意と努力がその素朴さにも一層輝きをましてゐた。

かうした実績がみとめられて昨夏ジャパンツーリストビュローの手によつて、副業青年の作品は新興満州国にも紹介されて益々その前途を輝かしいものにし、今夏開かれたパリの展覧会でも副業日本の躍進が世界の関心の内に力強く飛び込んで行つたことも、この展覧会の前途を一層に、明るいものにした。

かうした世界的関心は我々に一層に大きな期待を投げる。我々はいまこの展覧会をしてこれ等期待の前にも副業日本の精華を凝結せしめて、その真価を世に問ひたい。

そして、いま遭遇しつゝある経済的苦難をこの副業への精進を以て立派に打開して行きたい。

どんな小さなものでも青年の独創の体現さるゝ丈け尊い。全国諸君の絶大なる支援をまつ。

副業展要項

一、場所

日本青年館（東京市四谷区明治神宮外苑）

第二次展は開催しません

二、期日

昭和十年四月三日から七日まで五日間

三、出品資格

男女青年団員 男女青年団 青年団関係者

四、出品物

木工品 竹工品 金工品 藁工品 紙及紙工品 漆器 陶器 繊維工芸品 皮革工品 染織品
刺繍 編物 袋物 食料品等

五、出品物の申込み方

出品希望者は出品物の品目と点数の概要を記して早速御申込下さい。

この申込を受取つたら本団から次の通り三種の出品用紙及びその記入例を送ります。

(一) 出品票（一人一枚宛）

(二) 出品物調査票（一種類一枚宛）

(三) 定価票（一点一枚宛）

六、出品物の送り方

(一) 出品物は陳列上の都合もあり、開会間際に送られては間に合ひませんから左記の通り締切を厳守します、

締切三月二十日

(二) 荷造をしつかりして運送中に破損のない様に。

(三) 荷造箱を用ふる所では木ネヂ（ネヂ釘）で蓋をしめて下さると開ける時も箱をこはさずに済みます。

(四) 鉄道便の荷物は左記扱に指定してお出し下さい。

東京市原宿駅前 合同運送店○通取扱

(五) 出品のための送料は出品者が負担して下さい。

七、出品物の販売

(一) 展覧会では定価票の値段で即売します。

(二) 売上金総額の中から一割を差引き展覧会雑費にあてます。残り九割の金額は展覧会後一ヶ月以内に本団経理部から出品者に直送します。

(三) 売残品も一ヶ月以内に運賃先払で送りますからこれも出品者が支払つて下さい。

八、審査

本団で依頼した審査員の審査結果に基き、優秀と認められた作品に対しては賞状及び賞牌を贈ります。

九、展覧会後の指導

(一) 展覧会直後に図録或は座談会記録等を印刷し希望者に実費で頒ちます。

(二) 出品物中の或種の品物をえらび、改めて展覧会を開くことがあるかもしれません。

(三) 一年中を通じて諸君の不断の研究・考案・試作が繰返さるゝことゝ思ひます。その都度もし助言なり批評なりを求めたいと思はれる方は、試作品参考書類を添へて御送付下さい。本団ではそれぞれ適宜の専門家の所へ持つていつて御指導を仰いでお伝へします。

(四) 副業品の販売取引を望まるゝ方は本団代理部へお申越になれば、適宜御斡旋いたします。

十、郵便

副業展に関する郵便物は左記の通り楷書で間違のない様にお書き下さい。

東京市四谷区明治神宮外苑霞ヶ丘口

大日本聯合青年団副業点係宛

注意 昨年と規則が改正になつた点がありますから、出品希望者は「展覧会要項」を請求して熟読されたい。

① 104号 1935. 1. 15

「産業日本に先駆する副展・一人一研究展 全国団員待望裡にいよいよ近づく」

創作は、神から与へられた青年の特権だ。若き生命からのみ、創造の芽は萌える。

囚はれぬ自由な気もちと、すべての事物を直覺的に判断し得る新鮮な感覚は、何ものかを生み出さねば居られぬ衝動となつて現はれるものだ。青年団がその団員のもつ精神力を動員して、年毎に、新たなるものゝ創造発見に貢献して来た事実も亦こゝにある。我等は過去の功績を誇るものではないが、産業の世界に、無名の若き英雄を送り出したことは、既に世間の周知の事実である。産業報国は、青年のもつ最も愉快的な責務でなくてはならぬ。

しかしながら、世の中には絶対の創造はあり得ない。過去の文化と先人の研究を基礎として、更にこれを大成することも亦創意の加工と見ねばならぬ。

技能に、形式に、用途に、販売法に、加へられる零碎なる研究を珍重するものである。

誇張せられた殊更なる創作の名に囚はれてはならぬ。

×

来る四月三日より七日間で五日間、日本青年館に於て開かる第八回青年創作副業品展覧会、第五回一人一研究展覧会は全国青年団諸君の絶大なる支援によつて盛会を持ちたいと思ふ。いまこゝに出

品物に対する本団の注意を述べたい。詳細は本号通牒欄を参照せられんことを。

×

昭和十年所謂非常時の年が来た。国難に際して一国興亡の鍵を握るものは単に軍部ばかりではない。産業戦線の拡充は武力戦線の後盾として最も必要な要素だ。

諸君は日本軍人の強いことを知ると同時に、我国産業が世界的雄飛をなしつゝあることを知らねばならぬ。例へば日本の綿業に於ける地位は世界一で、綿製品の世界的供給国として断然他国を圧倒してゐる。人絹業の発達も世界諸国よりも後れてはゐたが、それでも一九三三年にはアメリカについて世界第二位の生産高を示してゐる。海国日本としての漁獲高も世界一だ。

この様な主要産業の間に伍して、日本が世界に誇りうるものは美術工芸の技に優れてゐることである。塗器・木地細工・竹細工などは、日本固有の材料による古来よりの伝統的工芸として、世界に独歩の地歩を占めてゐるものである。しかもこれらの品物の大部分は今なほ家内工業的に、各地の小さな工場で作られてゐるものだ。そこには副業品として製作されつゝある物も多分にあることを忘れてはならぬ。

×

副業品とは片手間に作られた物の意義ではない。生産生活に於ける景品の存在を意味するものではない。況んや手慰みもの、或は所謂手芸品といはれる類のものではない。

農家経営が多角的でなければならぬことは現代の定説である。多角的であるが為には労力の分配は最も意を用ひなければならぬものゝ一つだ。農閑期に物を作ることを、それは農家経営の一部分をなすものであつて、決して副と称すべきものではない。換言すれば従業日数や生産額が他の生産部面よりも少いからとて、これを軽視して副と称すべきではない。米麦を作ることと藁細工をすることとは、主副の関係ではなくして、部分の関係である。

わが家の新経営に、或は我が村の更生運動に精進してゐる青年諸君の間から、その運動の実績として新しい製作品の続々と送られることを望む

×

諸君に製作欲が燃えてゐるとしても、向ふ見ずに着手することは出来ない。副業運動は直ちに経済に影響することであるから、よほど周密な計画のもとに実行されねばならない。そこでいま諸君と共に副業品製作の根本問題について考へてみたい。

その一つは貿易工芸品としては、日本らしい特色の溢れた物が歓迎されてゐるといふことである。我々素人は貿易品などいへば、直ぐに西洋式の家具や食器などを連想する。しかしこれら洋式工芸品の製作には、日本人はどうしても西洋人には及ばない。むしろ日本特有の手法を生かして、日本人でなければ出来ない物を作つて彼等に示すに如くはない。

また購買心理から考へても彼等の求めるものは「東洋の味」であり、「日本の情調」であらう。

かくの如く貿易工芸品に一転機が来てゐることは、決して筆者の妄断ではなく、心ある工芸家も、貿易商も在外商務官も等しく認めるところである。

×

その二としては、古きを省みてこれを現代的に生かさねばならぬといふことである。足許に転つてゐるやうに思つてゐる物の中にも、用ひ方・生かし方によつては実に価値のあるものが沢山あるのである。志ある者は徒に改良進歩をいふ前に、先づ「現在ある物がどんな由来を持つてゐるか」を省みなければならぬ。

乃ちどんな工芸品を作るにもその材料の性質並に技術的操作には自ら限度がある。だから昔の我々の祖先が伝へて来た手法は、実は工夫に工夫を重ね、改良に改良を重ねてきたものである。この民

族的錬磨になる従来の工芸品を十分に研究し、数百年の歴史と数千人の手法とをわが一身に体得することは、即ち製作上の神通力を得る事である。

《写真》本団副業展の陳列場の美観

⑩ 110号 1935.4.15

「青年創作副業品展覧会と郷土舞踊民謡大会に賑つた本団郷土週間の盛況」

第八回青年創作副業品展覧会及び第五回一人一研究展覧会は、四月三日神武天皇祭の日を以つて、明治神宮外苑日本青年館に開かれた。

この日は、花もほころびようといふ暖かな絶好の日和に恵まれて、全国青年の創作に係る副業品を観覧する人、郷土色ゆたけき数々の品を購める人が、次から次へと、ひきもきらず押よせ、こゝ数年来稀なほど入場者があつた。開場日四月三日の一日だけで、売上高は八百円を超えてゐたことだけでも、その盛大さが窺はれやう。

四日の日も、入場者は、夥しき数に登つたが殊に五日からは、東京の年中行事とまでなつた日本青年館主催の郷土舞踊会が催されたので、幕間に展覧会を観覧する人だけでも二千人といふ多数で、文字通り場にあふれるの盛況を呈した。

宮内省御買上の光栄に輝く 副展と一人一研究展

侍従職、皇后宮職に於いては、天皇皇后両陛下が、国家の中堅となるべき青年男女の上に、注がせ給ふ大御心を体し奉つて、年々、本展覧会に侍従を御遣しになり、青年男女の創作品を求めしめられるのであるが、本年の如く、多数の御買上を得たことは、未だ一度もない。

青年創作副業品展覧会、一人一研究展覧会が開催されるに先立ち宮内省皇后宮職御内儀に於かせられては従職の黒田侍従を御差遣になり、出陳品を些細に視察せしめられ、北海道山越郡八雲町の八雲農民美術研究会の製作に係る時計掛外百四十三点の副業品を御買上になつた。

御買上に浴した人々の光栄は勿論であるが、これはただに御買上の榮を賜はつた人々の光栄たるに止まらず、全国の青年団青年団員及び青年団運動に最善の努力をしつゝある人々の光栄であつて、かゝることを拝するにつけても、両陛下の大御心のほどが拝察されて、唯々感激するのみである。この感激を永遠の感激とし、大御心に副ひ奉るため吾々は一層努力をしなくてはならないと本団理事をはじめ職員は感激してゐた。

副展・一研究展の審査委員会

副業品展覧会、一人一研究展覧会が開かれるに先立ち、四月二日午前十一時から本団に於いては、本団主事松原一彦氏、農林技師見坊兼光氏、同内海一雄氏、同大山彦二氏、林学博士三村鐘三郎氏、日本産業協会主事山中省二氏、家庭製作品奨励会の柴田竹子氏その他の審査員が一堂に会して、出陳品の優秀なるものを審査した結果、神戸市連合青年団の杉本忠幸君外二十二名の作品二十六点が入賞品と決定された。

これ等二十六点の創作品は入賞品として、場内に特別に設けられた陳列棚にならべられ、入場者の眼をひき、入賞品の前は、十重二十重の人垣がつくられてゐた。

尚ほ入賞品とその製作者は別記の通りである。

副業品展覧会出陳品の審査と前後して、本団主事松原一彦氏、同石原治良氏、同藤巻雪生氏、同山崎昇二郎氏、同見坊兼光氏、帝国発明協会技師田中熊次郎氏、同芦葉清三郎氏、北村寒吉氏、東京工業大学教授關口八重吉氏等の審査員が集まり、一人一研究資料展覧会へ出品された青年の力作を審査した。

副展入賞者《以下略、表6参照》

《写真》(右上) 宮内省御買上の光栄に浴した青年創作副業品と、一人一研究展出品埼玉県加藤君のカスリ

②① 111号 1935.5.1

(無題)

今年の副業品展覧会も盛会裡にすんだ。さて来年の出品は？

それよりも前に諸君は今年の展覧会出品物の傾向や批評や、製作技術・売行き等について聞きたいであらう。現にいま係員の手許には五六十の質問が来てゐる。それらの一々に答へかねるとしても、せめて共通点の多い大切な問題だけには答へておきたい。

また我々からみると、諸君の中には材料とよい手を持ちながら、一寸した工夫の足りないために、無駄な努力をしてゐるのではないか、と思はれるものもある。

かう考へてみると副展の係員として、年に一度の展覧会を開くためにも、平素から諸君の研究の相手をせねば相済まぬ。まして更生計画で何処の町村にも新しい副業乱立の折柄、今にして賢明な態度で副業に善処しなければ、延いては一家一村の浮沈に関する大問題となるぬとも限らぬ。

かような見地から本紙に副業欄を特設することゝした。諸君も次のやうな事柄について実地に問題となることがあれば遠慮なく申越して下さい。

- 一、副業計画について。
- 二、製作技術について。
- 三、製品の保護について。
- 四、販売について。
- 五、試作品の批評。

右の諸問題の調査や回答に関しては、公表と否とを問はず、最善の努力をつくす筈。また我々の力の及ばない点は、それぞれ専門家を煩すことも出来る。

地味に、しかも健実に、お互に手をとつて副業研究に邁進してほしい。

②② 134号 1936.4.15

「副展の出品締切迫る!! 創意になる作品を一奮つて送付されよー」

四月二十九日第九回青年創作副業品展覧会の出品締切はいよいよ迫つた。係員は毎夜遅くまでその準備整理に忙殺されてゐる。

さて、先月末日現在で出品申込者は五百人を超過し、その点数も三万余点にのぼり、品種も三千点を超えんとしてゐる。いま、出品地を概観するに例年の通り、長野、京都、岐阜、東京、埼玉、各府県よりの出品点数多く、他府県も、これに追随してゐる。中には僅か十数点しか出品されぬ県も

あるが、その出品物にも涙ぐましい努力と創意の表はれてゐるのが心強い。

今年度は、昨年度に比較して、目につく点は三点ある。その第一の傾向は新人の出品の多いことである。その数は例年の例を破つて約三分の二に達してゐる。その創作品には産業青年の熱と力を反映するやうな新しい生命が流れてゐる。荒削りの図太さがある。素朴さがある。その出品物は必ずや会場に、一段の精神さをあたへることと思ふ。

第二の傾向は、長年本団で叫んでゐることであるが、郷土色を豊かに盛つてゐるものの出品物の多いことだ。

手近かの郷土的の材料を選び、その材料の自然性を有数に利用して作られてゐる。何よりも堅実なものを作らうといふ意識で、丹念な手細工の過程にいそしむので、そこには神経質な、或は都会的な頹廢的な美的追及がない。

第三の傾向は、作品が用途に即してゐる。見かけ倒しや皮相な近代性的な装飾がない。実際の用に即し、そこから形の美が生れ、健康な美が感得される。

兎に角副業日本の先駆者として産業の大道を潑刺として歩みつゝある姿がそのまゝ、作品に現はれてゐる。

以上は今年度の大体の傾向であるが、詳しいことは、展覧会後に、個別的に批評することゝしたい。

こゝに注意して置き度い点が二三あるが、その一は出品物の宛名を間違へぬことだ。出品物は必ず新宿伊勢丹別館宛へ。又定価表はペンで書いて品物一点一点につけること。ノリでつかないものは、ゴムバンドか、ひもで結んで欲しい。出品物の荷造を嚴重とすることは、論を俟たないが、壊れ易い物は紙によく包んで箱の中に入れて欲しい。小さい箱に無理矢理に突込んでくると破損し易い。折角苦心して作り上げた創作品を闇に葬ることとなるから呉れ呉れも注意して欲しい。

さあ全国の団員諸君、その締切日が迫つて来た、産業戦線の血みどろの戦の結果を報告すべき時が迫つてゐる。若緑の五月の空東京に産業青年の意気を示さう。

(詳細は本紙第二百五号掲載の要項参照)

㉓ 136号 1936. 5. 15

「郷土色を盛つて華々しく開かれた青年創作副業品展…都人士の人気をあつめる…」

五月の空に鯉幟の翻る時青年創作副業品展覧会をデパートを会場として蓋を開けたことは本年始めての試みである。作品は全国から集まること、青年の創作の価値は認められたこと、副業品として、時間をかけ、丹心こめて作られたものであることによつて大いに都人士の歓心呼んだ。

これより曩六日午後農林技師の諸氏、其の他斯道の大家に審査を依頼し、入賞品も三十五点決定。作品は府県別に陳列され七日朝九時より華々しく蓋を開けたが、帝都デパート界の雄伊勢丹の事とて、大新宿の人気をさらつて、客足の多い事は想像外、準備委員始め本団職員一同只忙殺のうちに一日を終へた。

此の日畏き辺りでは斯道御奨励の有難きおぼし召を以つて、多数の御買上を戴き、一同聖慮に感激して居る次第である。

入賞及御買上品は後日本紙に発表の予定である。

本年度の出品点数は三万六千点、出品人数は五百余人。例年出品される、所謂常連の他に、今年度は新人の多かつた事は非常に喜ばしい。かてて加へて、実用品の増加、郷土色豊かな、そして質朴なものも比較的多かつたことは一般来客の大なる満足であつた。

なかにも岩手県のワカメ、凍豆腐、殊に手近なものを副業品とした徳島県出品の南京袋更生敷物、朝鮮よりの莞草手提、莞草スリツパなど好評を博してゐる。然し間々不深切なもの、周到の用意の欠けたものも見受けられたが、総体的に見て好成績であつた。点数は例年の通り長野県の木彫品が一番多く、東京の竹細工、滋賀の陶器、埼玉の釣竿と下駄等これに次ぐ。

出品の皆無の府県が一、二あつた事は遺憾である。

木彫玩具、竹竿、婦人向き家庭用品、食料品などの売行は素晴らしい。

観客に中年紳士、青年諸君のほか婦人の客が非常に多かつた。各々郷土からの陳列場所に真先きに馳（ママ）けよつて鋭い批評をしてゐるなど微笑ましい風景も随所に見られた。

次に本年度の新しい試みとして製作実演を会場内に公開した。出演の諸君は北海道の柴崎武司君の熊彫、山形県の上島與一郎君の胡桃細工、長野県的小林三十郎君と三井正男君の木彫細工、東京の櫻井正男君の花籠で、熱心に製作に没頭してゐる姿は実に涙ぐましいものがある。観客もこの実演場の前に黒山をなして押すな押すなの盛況、その器用な手口に見入つてゐるのも異風景であつた。

②④ 137号 1936.6.1

「副業日本の豪華版 満都の人気を集めた本団副展の盛況」

本団の青年創作副業品展覧会の第九回が、東京市四谷の新宿伊勢丹で去る五月七日から十日間に亘り盛大に開催されたことは既報の通りであつて、本年はこの展覧会を一人一研究展と分離してデパートで開いた関係からも、三万六千点からの出品物は、都人士の注意をひいて、羽根がはえたやうに売れ総売上高は五千有余円にのぼつた。

而して本年の副業品展覧会の盛況に関して、本団の主務者は次の如く観ている。

青年創作副業品展覧会に関して、本団では昨年末より準備にかゝり、精算の終るまで約半ケ年の間、他の想像の付かぬ程の忙しさで、職員はこの展覧会と闘ひ来つたのである。

そして、青年の努力と相俟つて、こゝに三万六千点と言ふ素晴らしい数字を示した事はお互に喜びあふべきである

出品物の傾向は実用品が断然多く、郷土色豊富なことに、例年に比して著しいものがあり、此の点実に力強さを感じたのである。

又食料品が非常に多く、殊に東北地方に多かつた事は、食糧自給の立前から見ても、大いに三嘆すべきであると思ふ。

然しながらこの好成績の出品物は約五分の三位で、未だ大いに考慮すべきものが多々あつた。展覧会は何でも手当り次第に持込む処ではないといふ事をもつと考へて貰ひ度い。模倣か偶然の一致か疑ふべき殆ど同一と言へる物が、西北両地方から出品されて居るものがあつたが、これ等はお互に、ありふれた材料でありふれた製法に依り、何等の技巧も無く、ありふれた品を作るから、模倣か偶然の一致か疑へるものが出来たのである。

あくまで青年自らのものを創り出さうとする清新な気持これこそ青年の生命であり本展覧会の生命であらう。

例年同じ物を出品する人もあるが、これらに全然進歩の跡の見られない時は誠に物寂しいものである。

次に会場は百貨店の事とて平均入場人員二万人、土曜、日曜は夜間営業の事とて四万から五万の人

で実に多忙なものであつた。

香坂理事長、田澤前理事長、福島常任理事を初め、諸先生方の御来場を得、隈なく、一点手に取つて御批判を戴いた。

新しい試みとしての製作実演は、前号に掲載の通り、北海道、東京、長野、山形より招いて、会場内に公開し好評を博した。

最後に、副業品は都会に売捌くのが目的のものでは決してないことを考へなくてはならない。

都会向に苦心して出品した物も見受けられたが、都会人の望むものは、質朴な、そして郷土色豊かなもの、又堅実な実用品であると言ふことを念頭に置いて、来るべき第十回の副業展を迎へよう。

四時間に亘る審査の結果入賞者三十八点決定す

本年は副展の開催に先立ち五月六日午後四時から、会場伊勢丹会議室で、本団に於いて囑託してある副業審査委員 農林技師 見坊兼光 ヶ 内海一雄 ヶ 大山彦二 農林省囑託 加藤喜作 全国販売組合連合会主事 山中省二 家庭製作品奨励会 柴田竹子 の参集を得て審査会を開いたが、農閑期に於ける青年の汗の結晶たる副業品を審査するのであるから、審査員の方々も非常に力瘤を入れ、三十八点の入賞品が決定したのは、午後八時半過で、委員は何れも青年の力作に感心してゐた。

因に入賞品及び入賞者は左記の通りである。《以下略、表7参照》

副業青年の光栄 皇后宮職御内儀より御買上の御沙汰を拝す

本団の副展へは、従来、年年宮内省侍従職の方々が来臨聖上陛下皇后陛下の斯道御奨励の有難き思召を体して、青年の手に成つた副業品を御買上になつたのであるが、今年も、副展開催の由を聞召されて、皇后宮職から侍従小出英経氏を御差遣になり、数々の品物を御買上になつた。

而してこの御買上の光栄に浴した者は、別記の人々であつて、副業青年としてこれにまさる榮譽はないのである。右に関し本団では云ふ。

年々侍従を御差遣になつて御買上の栄を賜はることは誠に畏き極みである。この感激をして、一時の感激に終らしめては誠に申わけないのであつて、本団では、益々青年の副業方面に力をそゝぎ、聖旨に副ひ奉る覚悟である。

御買上の光栄に浴した人々

《以下略、表9参照》

《写真》副展会場で出品を買上げられる小出侍従

㊤ 145号 1936.10.1

「副展回顧資料と農村工業化参考資料の陳列 一人一研究展に附設」

本団第十二回大会を期して一人一研究展覧会が開催されることは別記の通りであるがこの機会に郷土資料陳列所として二つの特別陳列を附設することゝなつた。

一つは第一回以来の本団副業品展覧会の優秀作品を陳列して、年々發達変遷の跡を辿らうとするもの。他は目下農村更生の主要題目の一たる農村工業化に関する参考資料の陳列。後者の出品先は農

林省・三井報恩会・農村工業協会で既に承諾済。出品物は豊富であるが会場が狭いといふ有様。大会の参加者並に近隣の団員諸君の来観を歓迎する。
会場並に会期は一人一研究展覧会に同じ。《中略》

②⑥ 150号 1936.12.15

「第十回青年創作副業品展覧会は明年秋期に開催されん——一人一研究展と同時に——」

第九回青年創作副業品展覧会はデパートに進出して行はれたが、色々の事情によつて第十回は以前の通り、日本青年館に於て一人一研究資料展覧会と一緒に開催されることになつた。時期は未定であるが大體年度の半過ぎとなるであらう。

開催の時期、方法、要項等は追つて本紙上に発表される筈であるが、開催の方針は従来より多少変更され、十分に指導意識を加味したものになるであらう。

副業期にも入つたので、団員諸君にはいゝものが出品出来るやうに、今から馬力をかけて、製品の作製に精進されたい。